千葉県袖ケ浦市

水神下遺跡

－小銅鐸・小型銅鏡・石製垂飾品出土状況再分析と遺跡の再評価－

２０１７
袖ケ浦市教育委員会

千葉県袖ケ浦市

水神下遺跡（すいじんした）

－小銅鐸・小型銅鏡・石製垂飾品出土状況再分析と遺跡の再評価－

２０１７
袖ケ浦市教育委員会

序　　文

市内奈良輪地区に所在する水神下遺跡は、袖ケ浦駅海側特定土地区画整理事業に伴い平成２２～２４年度に発掘調査が行われました。それらの調査成果は『水神下遺跡発掘調査報告書』として平成26年度に刊行し、皆さまにご活用いただいているところであります。

数多くの出土品の中で、「小銅鐸」と「小型銅鏡」、「石製垂飾品」の３点がまとまって発見されたことは全国的に見ても極めて珍しい例として注目を集めました。先に刊行した報告書の中でも、これらの帰属する時代や性格について検討しましたが、極めて特異な出土状況を示す小銅鐸等の在り方やこれらがこの袖ケ浦の地にもたらされた意義についてより一層明らかにすることを目的としまして、このたび小銅鐸等及びその周辺から出土した出土品について再度分析を行いました。

再分析の結果、小銅鐸等が古墳時代前期の中頃に廃棄されたことが明らかとなりました。また、小銅鐸を含め東海地方で製作された土器を中心に、北陸地方の影響を受けた土器が出土したこともわかりました。このことは、古代の国家形成期における列島規模のヒトやモノの動きの中に水神下遺跡が位置づけられ、この袖ケ浦の地にもその影響が及んでいたことを示す証拠となります。

この再分析の結果をまとめた本書が、水神下遺跡の重要性を考えることのみならず、埋蔵文化財への理解の一助となり、さらには保護を図るための資料として活用されることを切に願っております。

最後になりますが、本書の刊行にあたりましてご指導をいただきました袖ケ浦市文化財審議会委員の皆様をはじめ、関係者の皆様に対して心から厚くお礼申し上げます。

平成２９年３月

袖ケ浦市教育委員会
教育長　川島　悟

例　　言

1．本書は、平成 26 年度に袖ケ浦市教育委員会が刊行した『水神下遺跡発掘調査報告書』の内、古墳時代の自然流路から出土した小銅鐸・小型銅鏡・石製垂飾品の出土状況を再分析し、水神下遺跡を再評価するための調査報告書である。

2．本書に収録した遺跡は、千葉県袖ケ浦市奈良輪字水神 1,171 番２ほかに所在する水神下遺跡（調査コードＳＧ 051）である。

3．水神下遺跡は６次に亘る発掘調査が実施されている。各調査の期間等は、下記のとおりである。

発掘調査

第１次調査　期間：平成４年 11 月２日～平成４年 11 月 30 日　面積：1,110 ㎡ /22,200 ㎡

第２次調査　期間：平成 22 年７月 20 日～平成 22 年８月６日　面積：226 ㎡ /6,510 ㎡

第３次調査　期間：平成 23 年 10 月 24 日～平成 24 年２月８日　面積：3,770 ㎡

第５次調査　期間：平成 24 年２月１日～平成 24 年３月 16 日　面積：300 ㎡

第６次調査　期間：平成 24 年８月１日～平成 25 年１月９日　面積：2,810 ㎡

整理作業・報告書刊行

『平成４年度袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書　水神下遺跡』 期間：平成４年度

『平成 22 年度千葉県袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書』 期間：平成 22 年度

『水神下遺跡発掘調査報告書』（前報告書）　期間：平成 25、26 年度（HP からダウンロード可）

『水神下遺跡』（本報告書）

期間：平成 28 年４月１日～平成 29 年２月 28 日　調査機関：袖ケ浦市教育委員会

担当者：田中大介

4．本書で使用した地形図は下記の通りである。

第１図　　国土地理院発行　　25,000 分の１地形図　「姉崎」・「上総横田」・「奈良輪」・「木更津」

第２図　　国土地理院発行　　25,000 分の１地形図　「奈良輪」

5．本書に掲載した写真は、遺構を各調査担当者、出土遺物については、西原崇浩・田中が撮影した。

6．今回の発掘調査にともなう出土遺物・記録類等は袖ケ浦市教育委員会で保管している。

7．本報告書の刊行に際しては、袖ケ浦市文化財審議委員会の委員の皆様、酒巻忠史氏（木更津市教育委員会）にご指導、ご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

凡　　例

1．挿図の縮尺は各図に明記したとおりである。方位は座標北とした。

2．遺構実測図中のドットは遺物出土位置を示し、その内容は各図の凡例のとおりである。

3．遺構実測図中の「Ｋ」は撹乱を示す。

4．遺構及び遺物実測図は基本的に前報告書のものを使用するが、一部修正を加えた。また、今回新たに追加した資料もある。

5．遺構番号は前報告書を踏襲している。遺物番号は本報告書用に振り直しているが、前報告書の番号も（　）で併記した（例：２（80-70）、（　）内は前報告書番号である第 80 図 70 を示す）。

6．前報告書で掲載した遺物については前報告書の番号で収納し、本報告書で追加掲載した遺物については本報告書の番号で収納した。

目　　次

序文
例言
Ⅰ．序章 …… 1
　１．報告書刊行に至る経緯
　２．調査組織
　３．遺跡の立地と周辺の遺跡
　　（１）遺跡の地理的環境
　　（２）遺跡の歴史的環境
　４．再分析・再整理の方法
Ⅱ．小銅鐸等周辺の遺構と遺物 …… 7
　１．水神下遺跡の古墳時代の概要
　２．小銅鐸等周辺の遺構と遺物出土状況
　　（１）２号流路
　　（２）ＳＫ080
　　（３）ＳＤ033
　　（４）小銅鐸等
　３．小銅鐸等及び周辺の出土遺物
Ⅲ．水神下遺跡の再評価 ……23
　１．小銅鐸等について
　２．外来系土器
　３．土層堆積から見た水神下遺跡の変遷
Ⅳ．総括 ……32

表　目　次

表１　２号流路Ｎ９グリッド北半部出土遺物重量表
表２　２号流路Ｎ９グリッド北半部出土土器観察表
表３　千葉県内出土小銅鐸一覧
表４　千葉県内出土重圏文鏡一覧
表５　Ｓ字甕、宇田型甕重量表
表６　外来系土器観察表

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図
第２図　遺跡周辺地形図
第３図　古墳時代遺構配置図
第４図　小銅鐸等出土周辺遺構平面実測図及び出土遺物分布図
第５図　小銅鐸等出土周辺遺構断面実測図及び出土遺物分布図
第６図　小銅鐸等出土詳細平面図
第７図　小銅鐸等出土詳細断面図
第８図　出土遺物実測図（１）
第９図　出土遺物実測図（２）
第 10 図　出土遺物実測図（３）
第 11 図　出土遺物実測図（４）
第 12 図　外来系土器実測図
第 13 図　土層断面図
第 14 図　１号流路周辺遺物分布図

写 真 図 版 目 次

図版１　小銅鐸等周辺遺物出土状況（１）
図版２　小銅鐸等周辺遺物出土状況（２）
図版３　小銅鐸等周辺遺物出土状況（３）
図版４　２号流路Ｎ９グリッド出土土器
図版５　外来系土器、石製垂飾品
図版６　小銅鐸、小型銅鏡

Ⅰ．序　章

１．報告書刊行に至る経緯

袖ケ浦市海側特定土地区画整理事業に伴い平成 23・24 年度に袖ケ浦市教育委員会及び株式会社地域文化財研究所によって実施された水神下遺跡第３次・第５次・第６次発掘調査成果について、平成 25・26 年度に袖ケ浦市教育委員会が整理を実施し、平成 26 年度に『水神下遺跡発掘調査報告書』（以下、「前報告書」とする。）を刊行した。

水神下遺跡は、古墳時代の自然流路から「小銅鐸」・「小型銅鏡」・「石製垂飾品」（以下、箇所によっては「小銅鐸等」とする。）の３点がまとまって出土したことで注目されたが、前報告書では時間の制限や報告者の力量が不足していたことにより、それらの帰属時期及び性格について明確にすることができなかった。

そのため、袖ケ浦市教育委員会では小銅鐸等や周辺から出土した遺物の出土状況を再分析し、帰属時期を明確にして水神下遺跡の再評価をする必要があるとの認識に至り、平成 28 年度に市単費事業として小銅鐸等が出土した自然流路の一部の出土品の再整理を行い報告することとした。

なお、市の貴重な文化財として小銅鐸等を市の文化財に指定するために、袖ケ浦市文化財審議会において小銅鐸等について意見を伺った内容も本報告に反映した。

２．調査組織

袖ケ浦市教育委員会

教　育　長	川島　悟	教 育 部 長	井口　崇
教育部次長	森田　泰弘	教育部参事兼生涯学習課長	原田　光雄
副 課 長	西原　崇浩	主　　査	田中　大介（担当者）
副 主 査	前田　雅之	主任主事	大河原　務

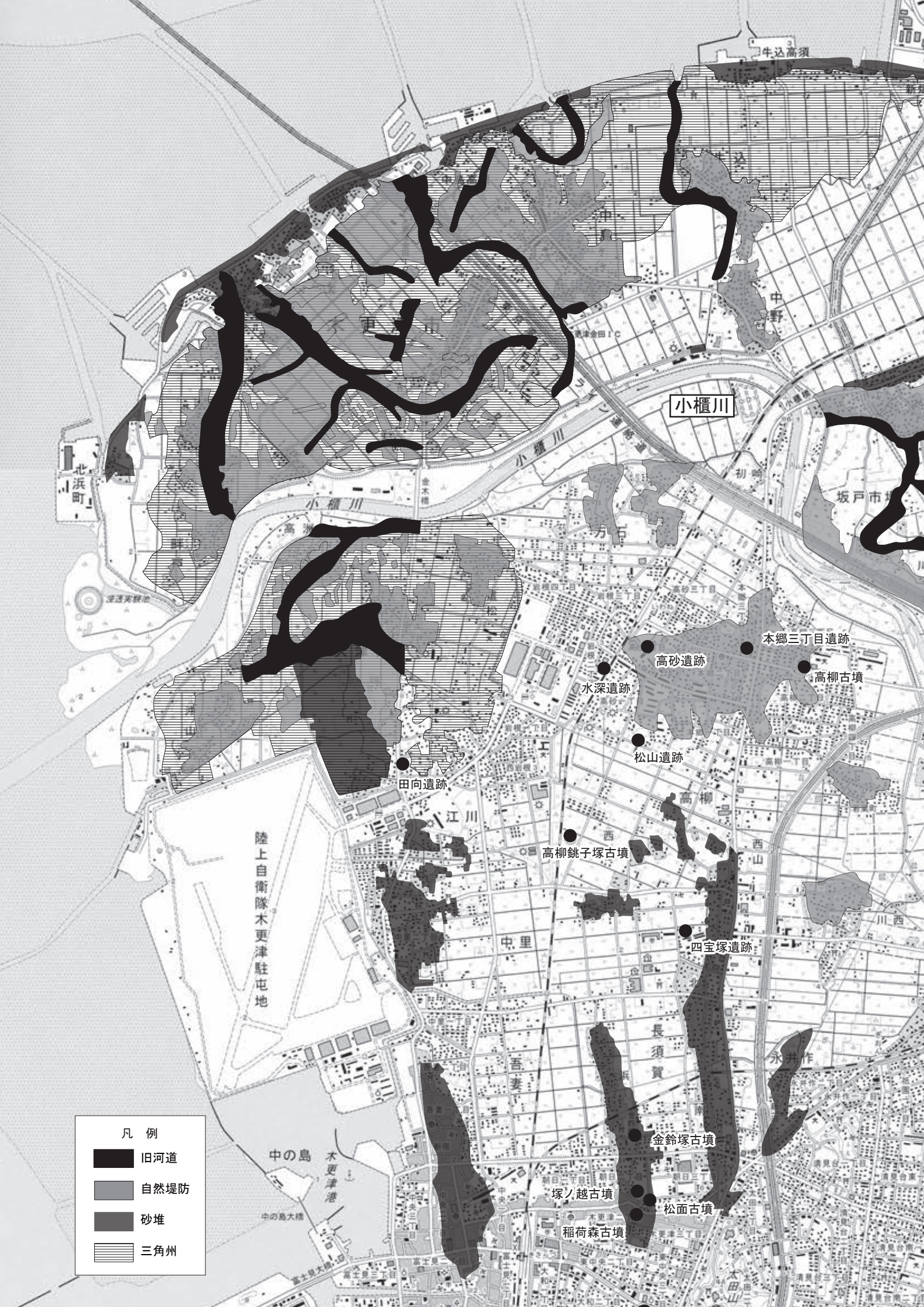
３．遺跡の立地と周辺の遺跡

（１）遺跡の地理的環境

袖ケ浦市は房総半島の東京湾岸のほぼ中央部に位置する。袖ケ浦市の地形は、下総台地の南端部に位置する北部の袖ヶ浦台地と清澄山系に水源を有する小櫃川によって形成された南部の沖積地に大きく区分される。小櫃川の南側にも台地が続いているが、袖ヶ浦台地と比べて平坦部が少なく丘陵状を呈する。

水神下遺跡はＪＲ内房線袖ケ浦駅の北側約 150 ｍに位置し、市内の臨海部で確認された唯一の遺跡である。

水神下遺跡が所在する小櫃川河口域を含む東京湾岸の地形は、約３万年前の最終氷期以降の海水面低下、上昇の影響を受け海岸線が変化し、約４千年前の縄文時代後期には現在の袖ケ浦市の台地西端部に及んでいたと考えられている。縄文時代後期以降、小櫃川河口域の地形は、東京湾の沿岸流と小櫃川の流れの影響により微地形が形成されてきた。小櫃川の流れにより西方の東京湾側にデルタ地形が広がっていく中で、小櫃川河口域の両岸には東京湾の沿岸流により、左岸に４列、右岸に３列の砂堆列が形成される他、小櫃川の氾濫によって各所に自然堤防が形成されている。左岸の砂堆列は、これまでの発掘調査の成果により、内陸側


小櫃川
本郷三丁目遺跡
高砂遺跡
高柳古墳
水深遺跡
松山遺跡
田向遺跡
高柳銚子塚古墳
四宝塚遺跡
金鈴塚古墳
塚ノ越古墳
松面古墳
稲荷森古墳
陸上自衛隊木更津駐屯地
中の島
木更津港
凡　例
旧河道
自然堤防
砂堆
三角州

第１図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

第２図　遺跡周辺地形図（S＝1/10,000）

から順に縄文後期から古墳時代の間に形成されたと考えられている。一方の右岸であるが、水神下遺跡が位置する第２砂堆列は、水神下遺跡の発掘調査成果により、弥生時代中期以降には形成されていたと考えられる。最も海側に位置する第１砂堆列での発掘調査事例はないが、第１砂堆列周辺に所在する集落の名前が中世の史料にも見られることから、少なくとも中世までには形成されたと考えられる。近世の水神下遺跡周辺を描いた『鳥飼家文書』の絵図のうち、寛文８年の「奈良輪村・中之村・市場村塩場絵図」と呼ばれる絵図には、第１砂堆列が砂嘴状に東方に張り出し、第１砂堆列と第２砂堆列の間に入り込む入江が描かれている。この入江は「古奈良輪湾」と呼ばれており、絵図の地名と対応すると、水神下遺跡は古奈良輪湾から 100 ～ 200 ｍの位置に所在していたと推定される。

（２）遺跡の歴史的環境

水神下遺跡は、古墳時代～近世にかけての遺構、縄文時代～近世までの遺物が出土する複合遺跡である。ここでは、本報告に関係のある弥生時代～古墳時代を中心に周辺の歴史的環境について概観する。

前述したように、小櫃川河口域の砂堆列や自然堤防は縄文時代後期～古墳時代にかけて形成されたものと考えられており、弥生時代中期以降になると生活の痕跡が認められる。

まず、弥生時代中期であるが、小櫃川左岸の最も陸地側の砂堆列北側の自然堤防上には弥生時代中期の住居が検出された高砂遺跡や本郷３丁目遺跡が所在しており、小櫃川左岸においては弥生時代中期以降、自然堤防上に集落が形成されていたことになる。一方、小櫃川右岸の周辺の弥生時代中期の遺跡を概観すると、水神下遺跡の東方約 900 ｍの台地上にある山王台遺跡や蔵波川の上流に位置する美生遺跡群、小櫃川に面する台地縁辺部の谷ノ台遺跡、西ノ窪遺跡や根形台遺跡群で集落・墓域が確認されており、台地上に生活の痕跡が認められる。

続く弥生時代後期になると、東京湾東岸の台地上において集落が拡大・展開し、続く古墳時代前期まで継続する遺跡が数多く認められる。また、小櫃川沖積地内に所在する学史で著名な菅生遺跡や芝野遺跡では、古墳時代前期まで継続する水田遺構が発見されている。

古墳時代前期の集落は、弥生時代後期から継続する遺跡が多く、台地上や沖積地に遺跡が分布している。また、前方後円墳や前方後方墳の墳墓が築造されるようになり、特に前方後円墳は小櫃川流域に拠点的に点在しており、前方後円墳を中心とした周辺集落の統括領域が想定されるものである。水神下遺跡の南東側の海食崖上の遺跡は、昭和の土地区画整理事業により未調査で破壊され詳細は不明であるが、唯一の調査例である山王台遺跡の状況からは濃密な遺構分布の展開が想定され、台地上の集落と水神下遺跡のような低地の集落との関連性が注目される。一方、墳墓と水神下遺跡の関係であるが、南西約 900 ｍには全長 62 ｍの前方後円墳である坂戸神社古墳が築造されている。未調査であるが４世紀代の築造と想定されおり、小櫃川下流域右岸における首長墳的な位置にある前方後円墳である。なお、坂戸神社古墳は、木更津台地に位置する三角縁神獣鏡が出土した手古塚古墳と同時期と想定され、小櫃川を挟んだ大局的な古墳として位置づけられる。そして、北東約 4.6 ㎞に位置する神田遺跡や根形台遺跡群の大曽根地区で前方後方墳が調査されている。出現期～前期の墳墓として位置づけられ、坂戸神社古墳の前段に築造された古墳と考えることができる。

中～後期になると左岸では、中大型前方後円墳や大型方墳等により構成される学史上著名な祇園・長須賀古墳群が造営される。特に後期の古墳は、第２～３砂堆列上に築造されており、第２砂堆列には金鈴塚古墳や稲荷森古墳などの大型前方後円墳のほか、松面古墳や塚ノ越古墳といった大型方墳が築造され、馬来田国

造への系譜をもつ盟主墳が累代的に造営されていたことが窺える。しかし、当該期の集落については、弥生時代後期から古墳時代前期に比べ激減しており、松山遺跡などで住居が確認されているにすぎない。

右岸の台地上の古墳時代中期の遺跡は、海岸側の山王台遺跡や金井崎遺跡、根崎遺跡、西ノ谷下遺跡、西久保下遺跡などが点在している。後期になると遺跡はさらに限定されて美生遺跡群や雷塚遺跡、西久保下遺跡、小櫃川流域の西ノ窪遺跡において確認されている。水神下遺跡では、竪穴住居は確認されていないが、自然流路内や塚盛土下から中～後期の土器が多数出土しているので、台地上のように点在する集落と同様に点在する中の一遺跡であると考えられる。

４．再分析・再整理の方法

前報告書では、遺構及び中グリッド（小グリッド（２×２ｍ）の４グリッド分に相当し、北西隅からａ･ｂ･ｃ・ｄ・ｅ……と割り振り、南東隅をｙとする 25 区に分割）ごとに出土遺物を分類、重量計測し、遺物の出土傾向を把握した。小銅鐸等に関わる古墳時代の土器については、前期、中期、後期の土師器及び中期、後期の須恵器に大きく５分類した。また発掘調査で出土位置を記録した遺物については、分類に基づいてドットを区別して表示した。

前報告書では、小銅鐸等が古墳時代後期のＳＤ 033 の底面から出土した状況を示しているが、発掘調査時の所見からすると溝を掘りすぎた可能性も指摘し、小銅鐸等の位置づけについて次の４点を挙げた。

①古墳時代前期に２号流路に廃棄された。

②古墳時代前期に２号流路に廃棄されたが、その後古墳時代後期のＳＤ 033 掘削時に偶然発見され、ＳＤ 033 の底面に配置された。

③弥生時代後期の製作以降、古墳時代後期まで約 300 年間に渡って伝世され、最終的に古墳時代後期のＳＤ 033 に埋納された。

④本来はＳＤ 033 と重複する土坑墓（ＳＫ 080：出土遺物から古墳時代後期に帰属すると考えられるが、本来は古墳時代前期と仮定）に埋納されていたが、ＳＤ 033 掘削時に土坑墓と重複範囲内にあった小銅鐸等が掘り起こされＳＤ 033 の底面に移動された。

以上から、小銅鐸等が古墳時代前期の２号流路に廃棄されたのか、あるいは後期のＳＤ 033 に置かれたのか、どちらに帰属するかが大きな問題点となっていた。

そこで、本報告では小銅鐸出土位置のやや広範囲（Ｎ９グリッド北側）について、前報告書で掲載した 100 分の１の縮尺よりも大きい 40 分の１縮尺で遺物出土状況の平面図と断面図を作成し、小銅鐸等の帰属時期について再分析した。

さらに、小銅鐸等を含めた他地域からの影響を受けたと考えられる土器については「外来系土器」（他地域から直接搬入されたものと他地域の土器を模倣したものを含む）として再抽出した。

また、前報告書において古墳時代後期における自然流路の止水、陸化という環境変化を確認したが、調査範囲際の土層堆積と遺物出土状況を確認し、水神下遺跡の通時的な変遷についても検討した。

このように、①小銅鐸等の出土時期、②外来系土器、③遺跡の変遷の３点を再検討し、水神下遺跡の再評価を行った。

なお、計測値等の必要な箇所については前報告書の内容を記載したが、再分析により遺物の時期変更や新たな所見が得られた箇所についてはその内容を明記した。

Ⅱ．小銅鐸等周辺の遺構と遺物

１．水神下遺跡の古墳時代の概要

小銅鐸等の再分析を行う前に、まず水神下遺跡の古墳時代について概観する。水神下遺跡から検出された古墳時代の遺構は、自然流路２条（前～後期）、竪穴状遺構９基（前期７基、中期１基、後期１基）、溝２条（後期）、土坑 24 基（前期４基、中期１基、後期 15 基、時期不明４基）である（第３図）。

東西方向に伸びる砂堆の南北裾部で古墳時代前～後期にかけての自然流路（１、２号流路）が検出され、その流路内及び周辺にいくつかのまとまりをもって古墳時代の遺物が出土している。特に調査区南東端のＯ 10 グリッドの流路縁辺部から前期中葉の土器が大量に出土した。今回再調査した小銅鐸等も大量の土器とともに２号流路のＮ９グリッドから出土している。前期の流路以外の遺構は基本的に流路跡に挟まれた砂堆上に形成されている。特に調査範囲南西部のＦ 13、Ｇ 13、Ｈ 13 グリッドからは前期の竪穴状遺構５基と井戸と想定される土坑３基とともに前期の中でも比較的古い時期の土器が多量に出土した。中期の遺構は、Ｉ 11 グリッドに所在した中世の塚の盛土下で検出された竪穴状遺構１基とＭ 11 グリッドの１号流路南側で検出された土坑１基のみである。この土坑からは底部付近に穿孔が施された壺が見つかった。後期になると、黒褐色粘土層の堆積状況から２号流路の流れが止まり、一時的に退水したものと考えられる。退水、陸化した２号流路と重複して土坑墓や溝が検出された他、１号流路周辺でも竪穴状遺構や土坑が検出された。

２．小銅鐸等周辺の遺構と遺物出土状況

（１）２号流路（第３・４・５図）

位置：Ｉ 10、Ｊ 10、Ｋ 10、Ｌ 9、Ｌ 10、Ｍ９、Ｎ９、Ｎ 10、Ｏ 10 グリッド　　規模・形状：長さ約 140 m、幅 1.9 ～ 13.8 m以上、深さ 0.17 ～ 0.65 m。小銅鐸等が検出されたＮ９グリッドの北側は、北東側のＮ９-i グリッドの北西部付近を頂点とし南西方向に両辺が広がる三角形状の平面形態を呈する。２号流路全体の平面形状をみると、蛇行しているものの、基本的には両辺が平行しているのに対し、Ｎ９グリッド北半部だけは北東方向へ三角形状に拡大していることがわかる（第３図）。Ｎ９グリッドにおける自然流路の断面形態は、北側は縁辺から 0.5 ～１mは緩やかに傾斜した後、急激に落ち込むのに対し、最も幅の広い北東側は縁辺から緩やかに傾斜する。底面はほぼ平坦で、南西側に向かってわずかに立ち上がる。三角形の頂点付近のＮ９-i グリッドから南西側のＮ９-k グリッドまでの幅は 13.8 mを測る。Ｎ９-g グリッド付近が最も低くなり、北東側の縁辺部との高低差は 0.4 ～ 0.6 mを測る。　土層堆積：土層断面をみると、基本的には黒褐色砂質土が堆積している。注目されるのは遺構確認面下 0.3 mの標高約 1.2 m付近に厚さ 0.05 ～ 0.08 mで水平堆積している粘性の強い黒褐色砂質土層（以下、「黒褐色粘土層」とする）である。本土層の平面分布範囲は図化していないが、セクション図から復元すると、流路の中央部に当たるＮ９-f ～Ｎ９-h グリッドにかけての東西方向に分布していたものと推定される。本土層は、２号流路の水の流れが止まったことによりＮ９グリッド北側部分が退水したことに伴い形成されたと考えられ、後述するように後期の段階になると本土層を掘削して土坑墓や溝などの遺構が作られるようになる。　　遺物出土状況：古墳時代前期と後期の遺物が出土しており、前期は中葉が主体となり、後期は全般的に出土しているが、後葉～末葉が主体とな

る。遺物の平面分布をみると、黒褐色粘土層の推定範囲と重複するＮ９-f ～Ｎ９-h グリッドにかけて分布する傾向にあり、特に北東側に突出するＮ９-h グリッドに分布が集中する。さらに黒褐色粘土層の縁辺部付近に発掘調査時に出土状況の微細図を作図した比較的遺存状態の良好な土器が分布するという特徴が認められる。土層断面図に投影した遺物の垂直分布図をみると、黒褐色粘土層を境として、明らかに出土する土器の時期が異なることがわかる。すなわち、本土層よりも下層では前期の土器が出土しているのに対し、上層では後期の遺物が出土していることになる。そのため､出土レベルを元に土器の時期を再検討したところ、流路縁辺や前述した黒褐色粘土層の縁辺付近に分布する遺物について時期を変更することとした。後期から前期に変更した遺物は第９図 35 の１点であるが、前期から後期へ変更した遺物は第 10 図 52、53、55、56、57 の５点である。一方で、確実に前期とされる遺物が黒褐色粘土層より上層から出土する例が若干認められるが、これらはもともと流路の縁辺部に廃棄された土器が、黒褐色粘土層堆積後に縁辺から流路内に流れ込んでしまったためと思われる（第８図 10、16 など)。最も多くの遺物が出土している北東側に突出するＮ９-h グリッドにおいては、重量比でみるとこれまで前期の土器が後期の土器の約３倍出土していたが、今回の変更を反映させると前期と後期の土器がほぼ同じ割合になった（表１)。

（２）ＳＫ 080 （第４・５図)

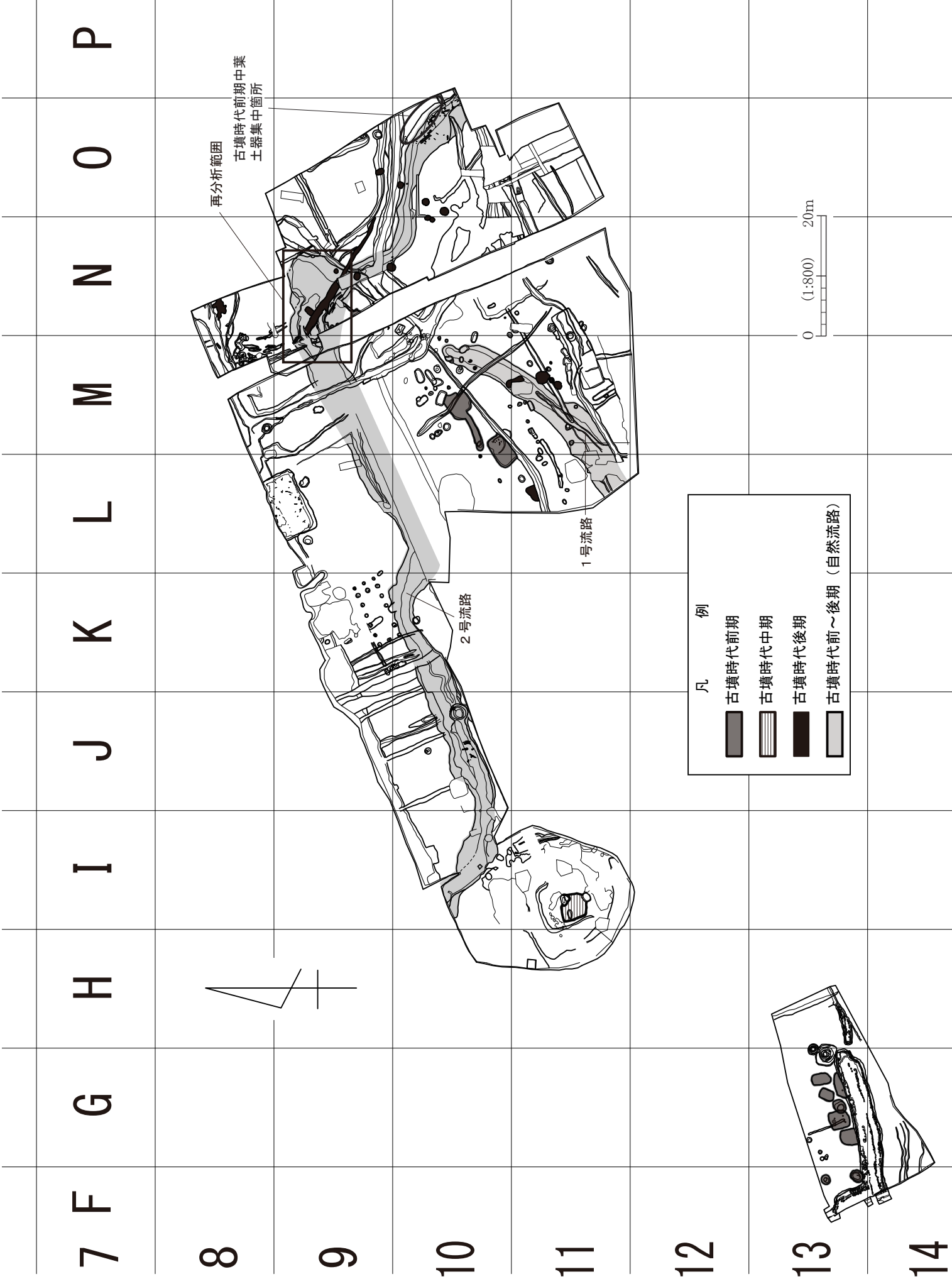
位置：Ｎ９-f、g グリッド　　規模・形状：長軸 2.18 m・短軸 1.19 m・深さ 0.58 m、平面形態は長方形、断面形態は箱形。ＳＤ 033 の走行方向に直交する。形態から土坑墓と考えられる。　　重複関係：２号流路より新しく、ＳＤ 033 より古い。なお、前報告書では明記しなかったが、２号流路に堆積した黒褐色粘土層を切って本土坑が形成されている（第５図Ｅ－Ｅ’)。　　出土遺物：古墳時代後期の土師器坏２点が一括遺物として出土し、１点図示した（第９図 39)。後期後～末葉の特徴を備えているため、土坑墓の時期を示すものと判断したが、ＳＤ 033 からも同時期の破片が出土しているため、本来は本土坑よりも新しいＳＤ 033 に伴うものと考えられる。

（３）ＳＤ 033（第４・５図)

位置：Ｎ９　　規模・形状：長さ 25.6 m・幅 0.3 ～ 1.5 m・深さ 0.16 ～ 0.2 m、走行方向は南東―北西方向にほぼ直線的。断面形態は皿形を呈する。なお、発掘調査時の所見として、当初は本溝調査終了段階の底面よりも７～８㎝高いところを底面と捉えていたが、この面が掘り足らないと思われたことから、さらに掘り下げたとのことである（第５図Ｅ－Ｅ’)。　　重複関係:２号流路、ＳＫ 080 より新しい。　　出土遺物:前期から後期までの遺物が出土している。２号流路、ＳＫ 080 より新しいこと、Ｎ９-l の東端で出土しているＴＫ 217 型式並行の須恵器坏（第９図 43）や小破片ながらそれと同時期の土器がＳＤ 033 から出土していることから、本溝の形成は後期末葉と考えられる。なお、前期土師器（第８図６、９、18）とＭＴ 15 型式並行の須恵器坏（第９図 42）等は流れ込みによるものと思われる。

（４）小銅鐸等（第６・７図)

位置:Ｎ９－ｆ（Ｎ９-21)　　出土状況:径 20 ㎝の範囲内にまとまって出土した。小銅鐸は片面が上を向き、鈕が東側を向いた状態、小型銅鏡は鏡面が上に向いた状態、石製垂飾品は片面が上を向き、穿孔部が北東側を向き北東側へ傾いた状態でそれぞれ出土した。小銅鐸等が出土した周囲は金属成分により赤褐色化してい



第３図　古墳時代遺構配置図

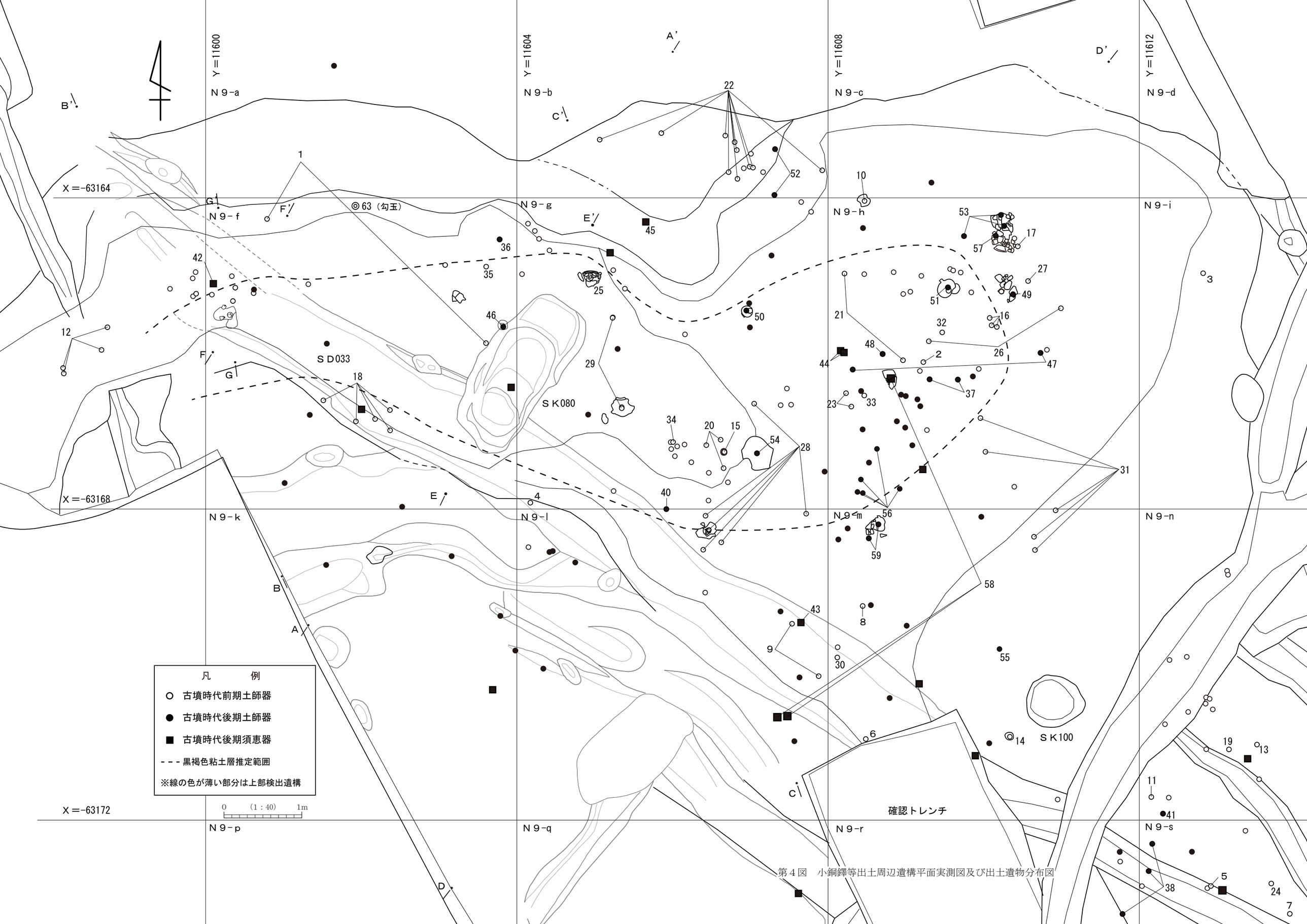
た。垂直分布をみると、小銅鐸と小型銅鏡が標高 1.02 ｍを最下レベルとしてほぼＳＤ 033 の底面から出土しているのに対し、石製垂飾品は、標高 0.97 ｍを最下レベルとしＳＤ 033 の底面に食い込むような状態を示す。ＳＤ 033 の底面レベルをみると、南東側からＳＫ 080 と切り合う第５図Ｅ－Ｅ’セクション、小銅鐸等エレベーション作図箇所（第７図）、第５図Ｂ－Ｂ’セクションすべてにおいて標高 1.0 ｍとなっている。しかし、先のＳＤ 033 の所でも述べたように、第５図Ｅ－Ｅ’セクションにおいては当初の底面を７㎝程高いところと捉えていたとのことから、小銅鐸等エレベーション作図箇所においても同様に底面が７㎝高かったと仮定すると、小銅鐸等は２号流路の覆土中から出土したことになる。掘り過ぎの可能性があるとは言え、ＳＤ 033 の底面と小銅鐸等の出土レベルは非常に近いレベルにあったことは間違いなく、その中で石製垂飾品がＳＤ 033 の底面に突き刺さるような出土状態を示していることと、小銅鐸等３点が一緒に取り扱われたものと考えられることを考慮すると、小銅鐸等は限りなくＳＤ 033 の底面に近い２号流路の覆土中から出土したものと判断できる。

３．小銅鐸等及び周辺の出土遺物（第８～ 11 図）

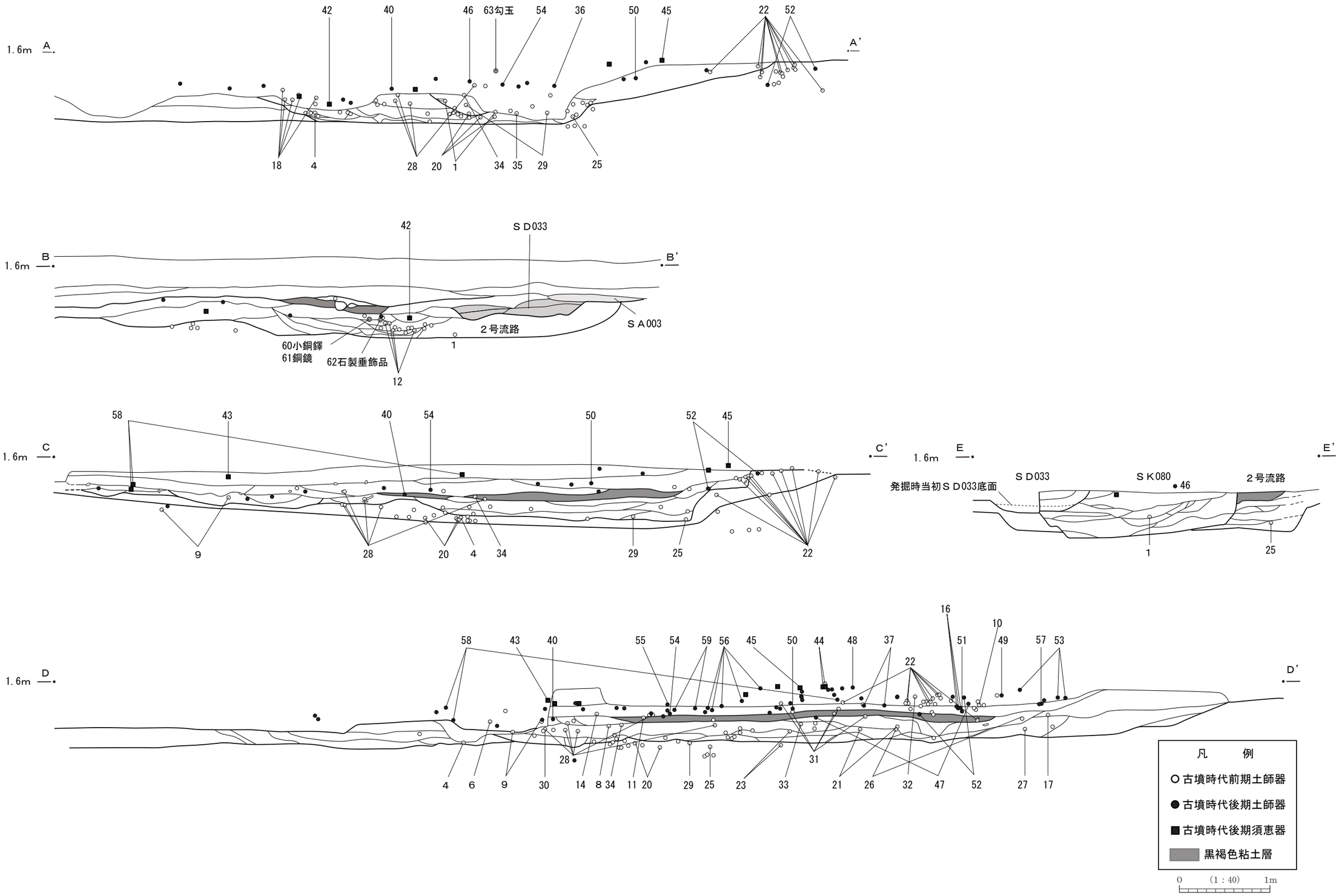
小銅鐸は、前報告書では平面側の見通し断面（一番左の図）に舞孔の表現が欠如していたため、本報告書ではそれを加えた（第 11 図 60）。小銅鐸の計測値は、高さ 62.6 ㎜、最大幅 40.5 ㎜で、重さ 33.98g を測る。小銅鐸の各部位の形態をみると、鈕は舞部から半円形状に巡り、鈕の断面が概ね菱形を呈する。最上部からややずれた箇所が食い込んだようにやや細くなっていることから、使用時の懸垂による摩耗と考えられる。鐸身部は 45.6 ㎜を測り、鈕からも含めて裾部に向かいややハの字状に開く。鐸身上部の両面に２孔ずつの型持孔が認められる。鐸身裾部は長径 40.5 ㎜、短径 19.0 ㎜で、内面に突帯が巡る。舞部は長径 25.1 ㎜、短径 17.3 ㎜の楕円形を呈し、中央部と中央部より鈕の付け根側に偏った位置の２箇所に舞孔が認められる。これらの形態的特徴は、松井分類の４Ａａ類（松井 2004）、比田井分類のＤ類（比田井 2001）に相当する。

小型銅鏡は、いわゆる重圏文である。計測値は、鏡面径 63 ～ 64 ㎜、鏡縁厚 2.5 ㎜、外区厚 2.5 ㎜、内区厚 2.0 ㎜、鈕最大径 14.8 ㎜、鈕高 5.0 ㎜、鈕口径 1.48 ㎜、重量 33.37g である（第 11 図 61）。次に形態や文様についてみてみる。鏡面は平滑に仕上げられている一方、鏡背は錆により肉眼では形態や文様が不明である。鏡背のＸ線写真をみると、鈕は半円形を呈し、内区には鈕座と内区の境界を示す界線の他、４重の圏線が巡る。内区と外区の境には鏡の中心から放射状に展開するように配される直行櫛歯文が施される。外区は櫛歯文の外周部に幅９㎜の素文帯が巡り、鏡縁は斜方向に面取りされる。

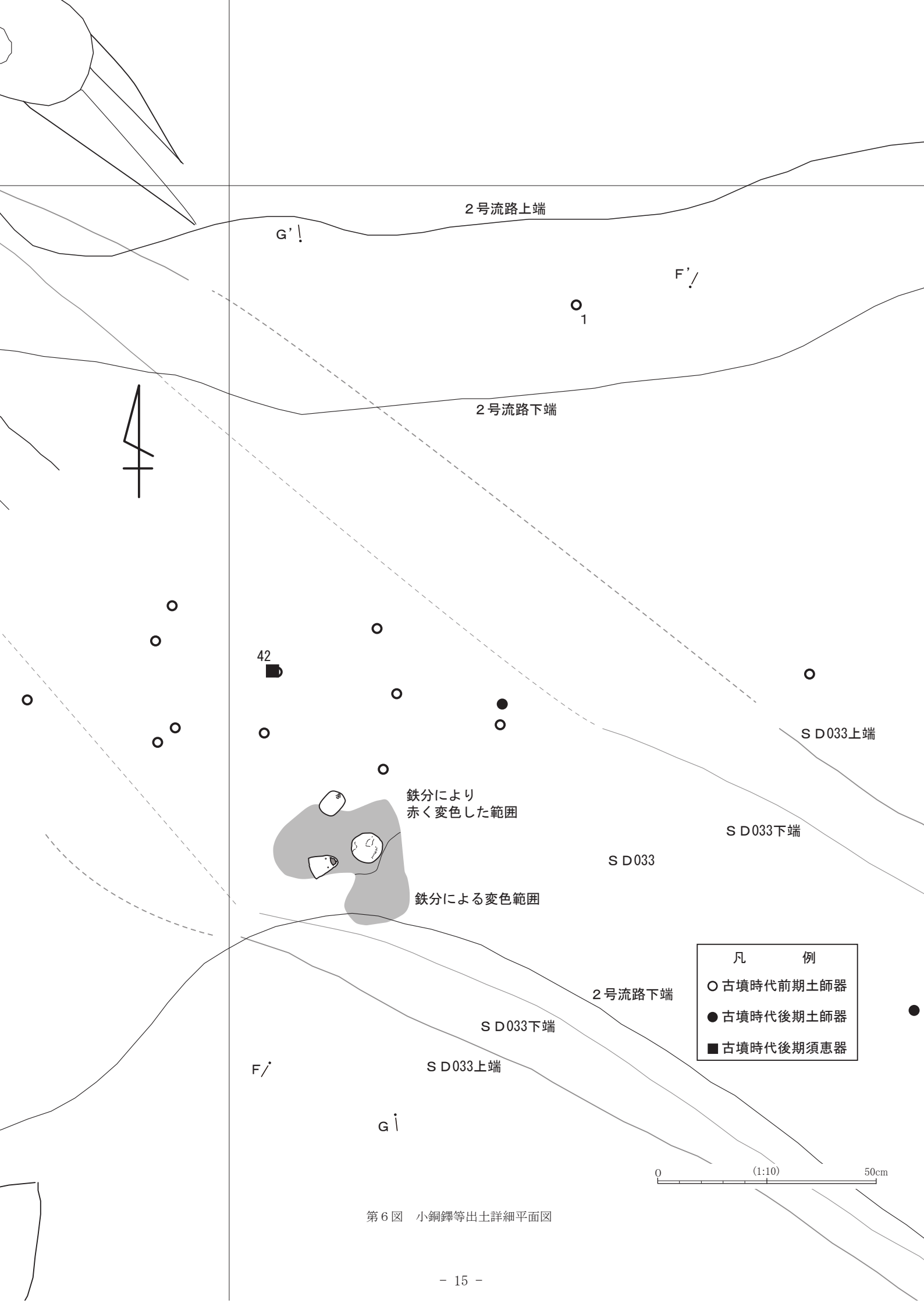
石製垂飾品は、長さ 53.6 ㎜、幅 43.1㎜、厚さ 10.5 ㎜、重量 41.87g を測る（第 11 図 62）。前報告書では石材を蛇紋岩として報告していたが、比重を用いた非破壊による石材鑑定を行ったところ、比重が 2.92 であり「透閃石岩」であることが判明した。透閃石岩は、透閃石（トレモナイト）から構成される、淡帯緑白色～灰緑色を呈する石材で、磨くと明瞭な光沢を生じる。比重は 2.85 ～ 3.00 の範囲に分布し、衝撃に対しては極めて丈夫な石材である。なお、蛇紋岩の比重は 2.85 未満であるため、両者は明確に分離できる。透閃石岩の石材産地は新潟県南西部の糸魚川市から富山県方面と推定されている。扁平な楕円礫を素材として、全面を著しく研磨し、側面全体にわずかな平坦面を有する小判形を呈する。穿孔部の上部に紐ずれが見られることから、紐を通してペンダントとして利用されていたと考えられる。



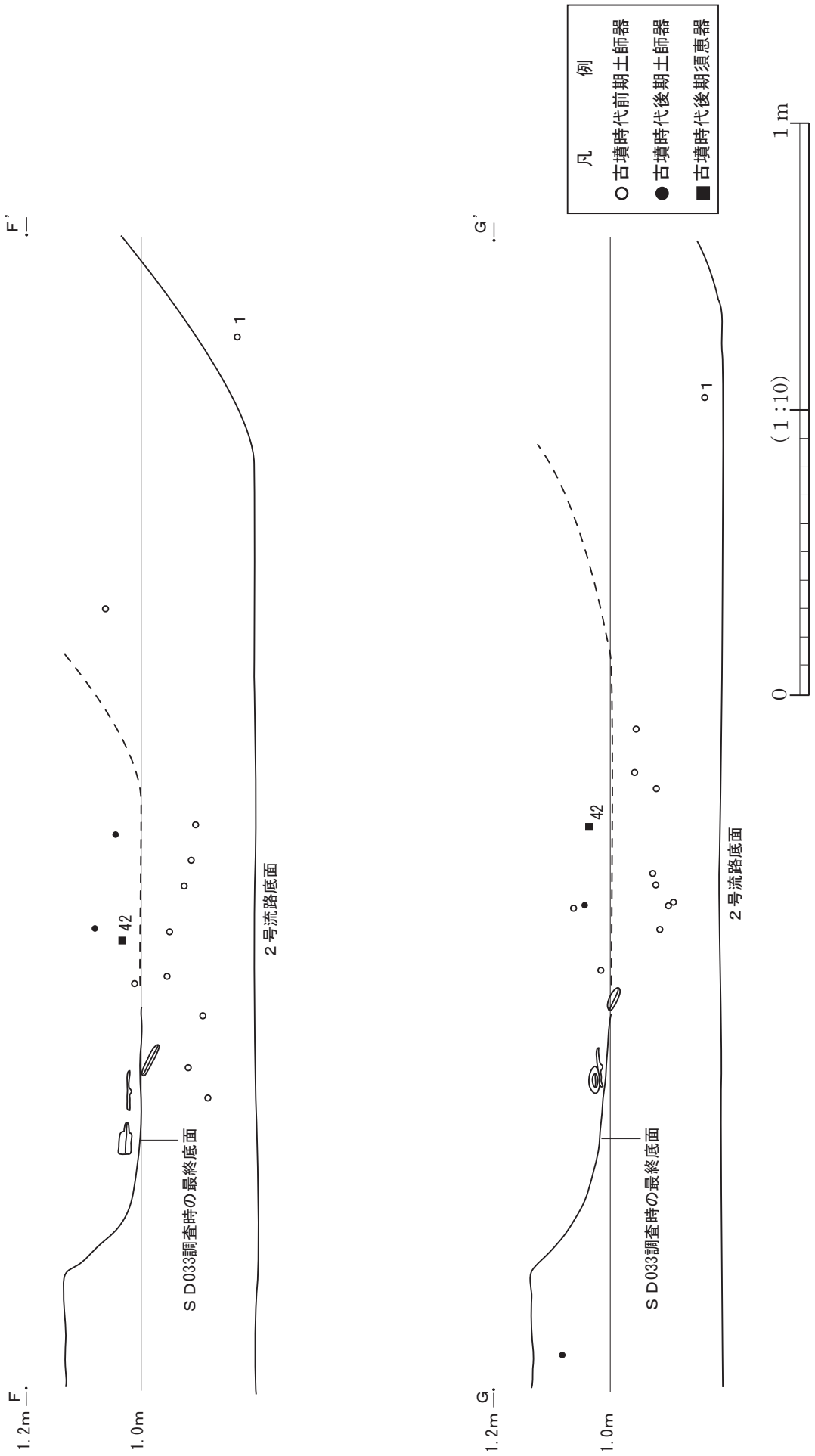
第４図　小銅鐸等出土周辺遺構平面実測図及び出土遺物分布図



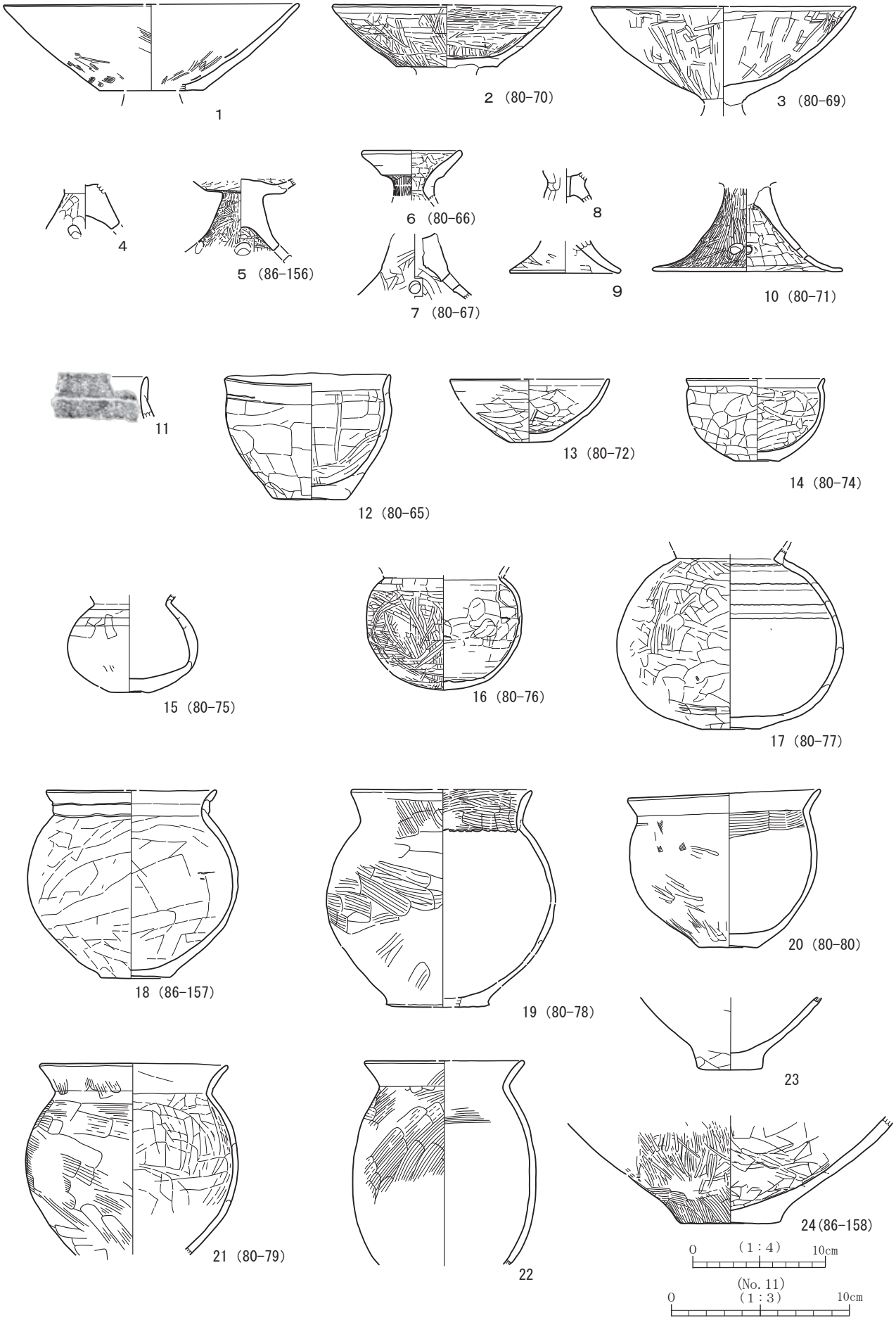
第５図　小銅鐸等出土周辺遺構断面実測図及び出土遺物分布図



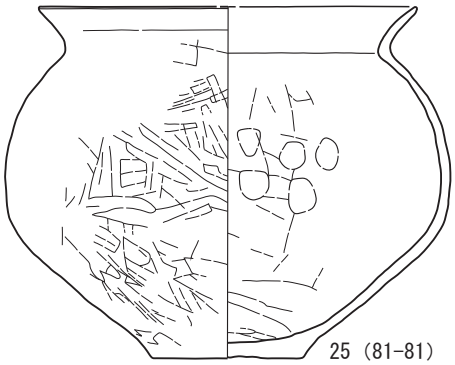
第６図　小銅鐸等出土詳細平面図



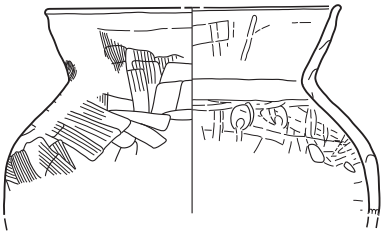
第７図　小銅鐸等出土詳細断面図



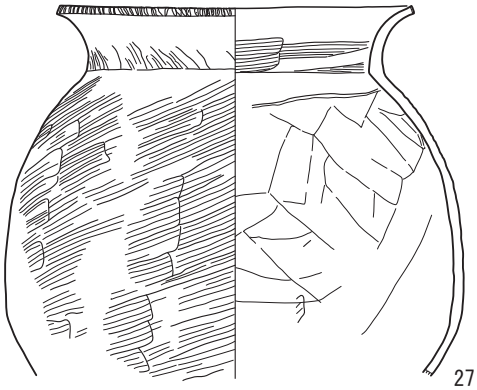
第８図　出土遺物実測図（１）



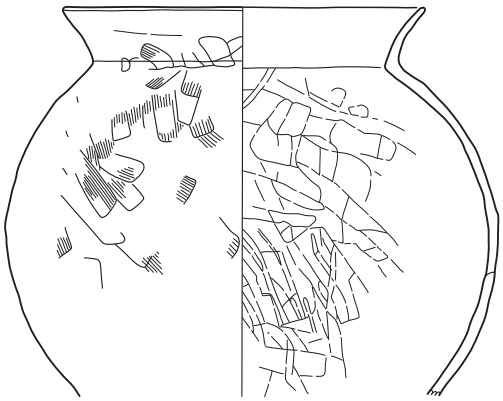
25（81-81）



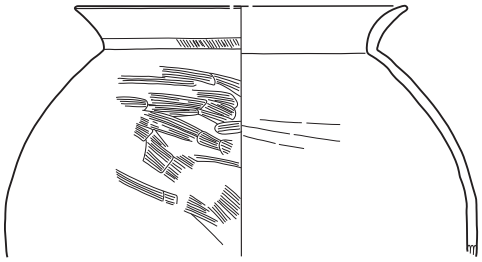
26（81-82）



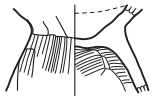
27（81-83）



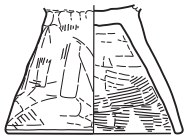
28（81-85）



29



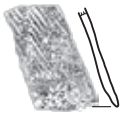
30



31（81-90）

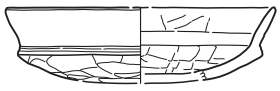
32（81-88）

33（81-89）

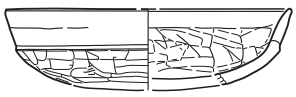


34

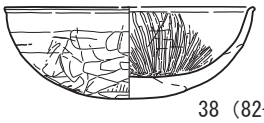
35（82-101）



36（82-91）



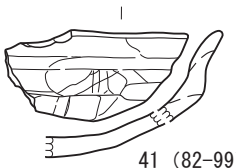
37（82-92）



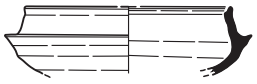
38（82-94）

39（89-191：ＳＫ080）

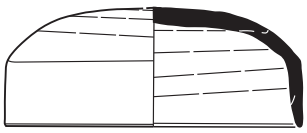
40



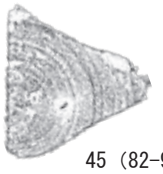
41（82-99）



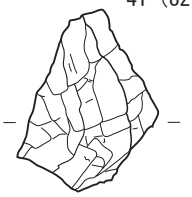
42（82-95：ＳＤ033）



44（82-97）



45（82-98）



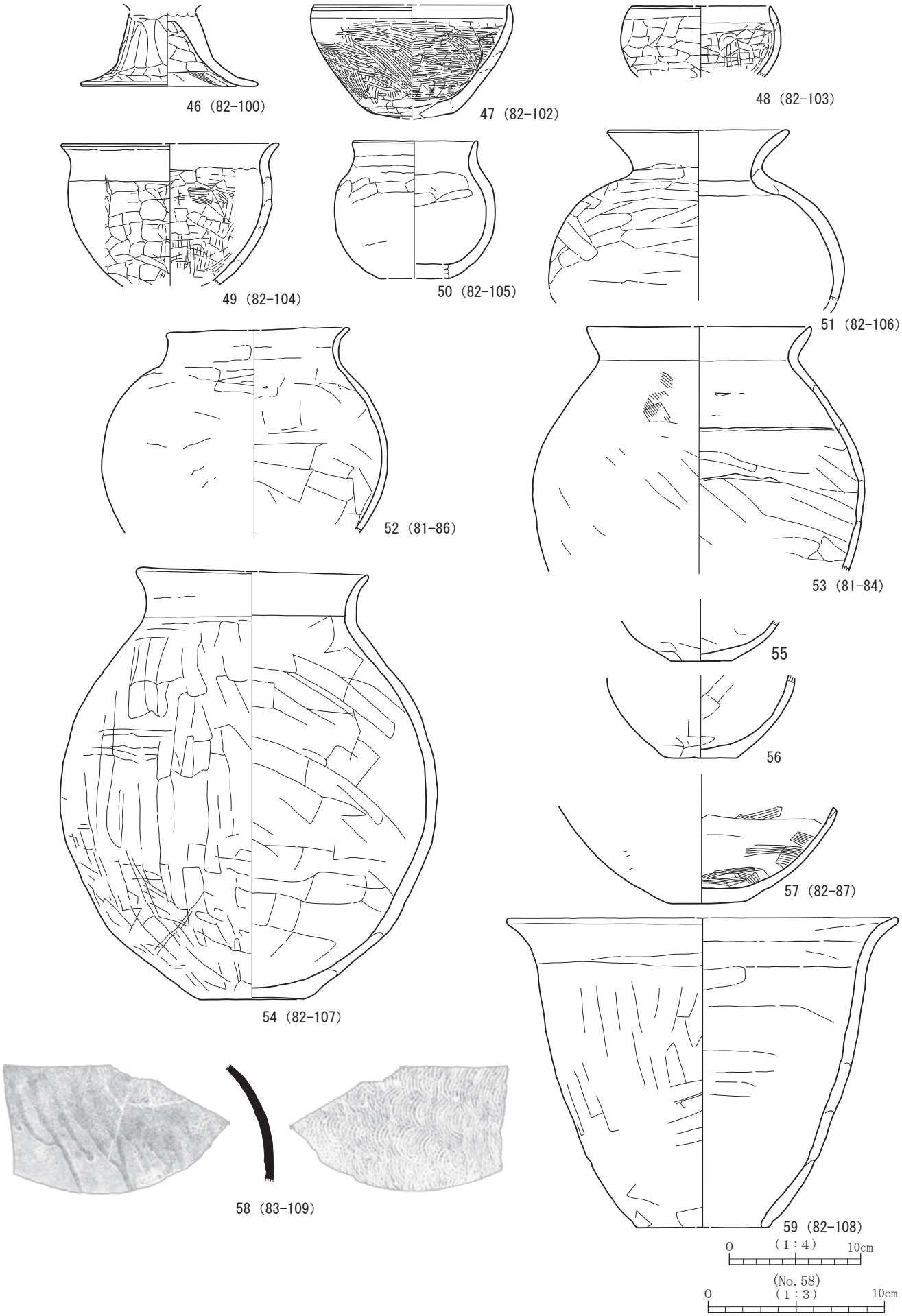
43（82-96）

0　（1：4）　10cm

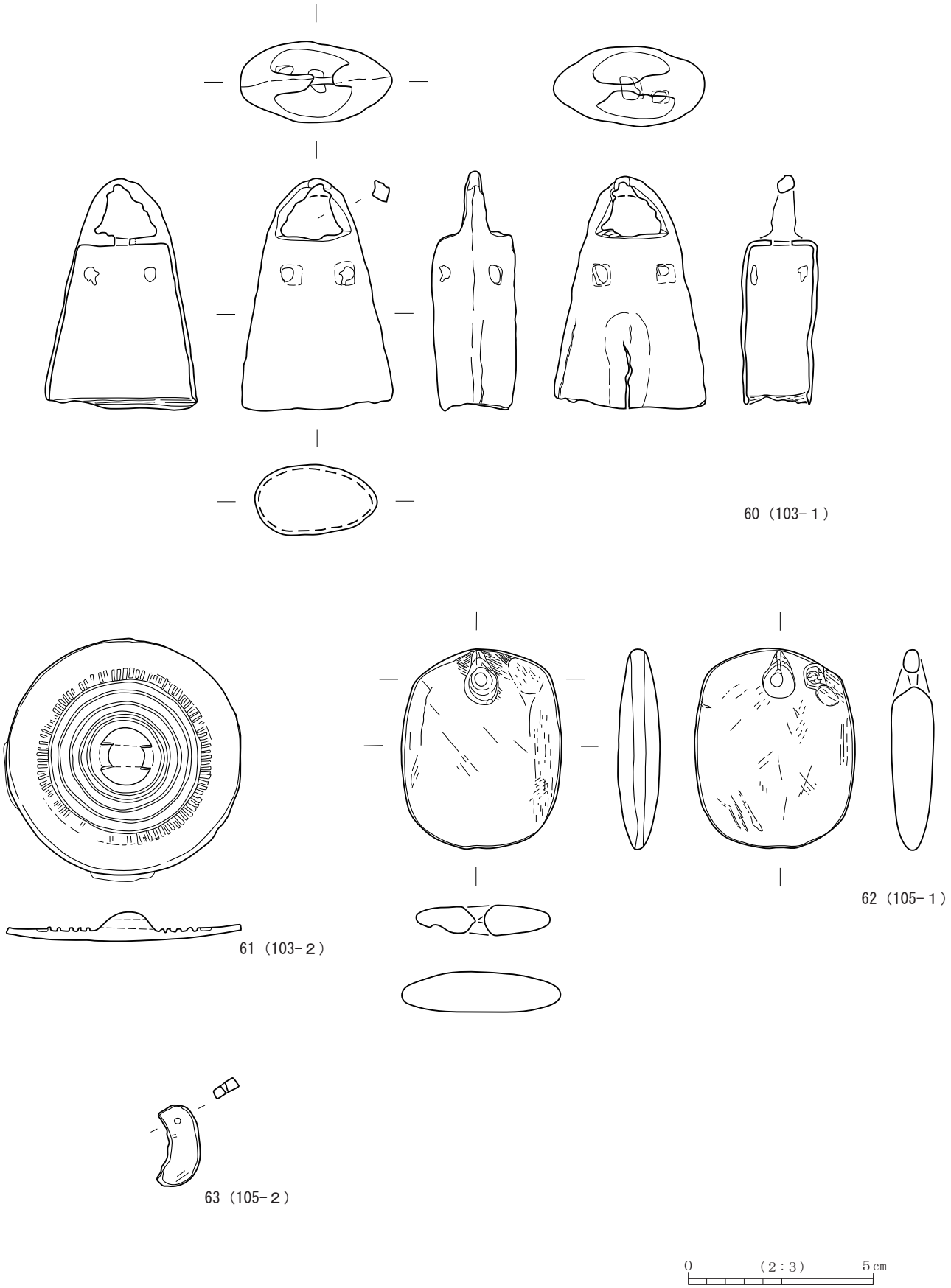
（No. 34・41・45）

0　（1：3）　10cm

第９図　出土遺物実測図（２）



第10図　出土遺物実測図（3）



第 11 図　出土遺物実測図（４）

表１　２号流路Ｎ９グリッド北半部出土遺物重量表

遺構名 グリッド名	古墳時代(g)				
	前期 土師器	中期 土師器	後期 土師器	後期 須恵器	時期不明 土器
2号流路N9-b	300.37		666.83		47.49
2号流路N9-f	318.04		365.01	2.35	1,319.95
2号流路N9-g	1,426.86		544.04	4.19	2,705.65
2号流路N9-h	3,191.73		3,077.51	533.60	4,427.03
2号流路N9-i	182.16				133.32
2号流路N9-k				83.21	232.35
2号流路N9-l	37.92		88.97	58.48	2,000.76
2号流路N9-m	485.43		202.53	62.76	2,775.13
2号流路N9-n	498.78		51.60	12.45	602.72
2号流路N9-q	75.81			26.74	607.76
2号流路N9-r	52.71		109.25	78.65	1,273.14
2号流路N9-s	573.49		340.34	11.41	5,168.46

表２　２号流路Ｎ９グリッド北半部出土土器観察表

遺構番号 挿図番号	遺物 番号	前報告書 番号	器種	遺存率	口径	器高	底径	色調	混入物	調整技法等	備考
2号流路N9 第8図	1	—	高坏	口縁部　わずか 坏体部　60% 脚部欠損	(22.5)	6.6～	—	橙褐色	赤褐色粒子 白色粒子	外面：ナナメハケ目 →ナナメヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	内外面器面荒れる。坏部の屈曲が非常に明瞭
2号流路N9 第8図	2	80-70	高坏	坏部30% 脚部欠損	17.4	4.8～	—	赤褐色～ 橙色	黒色粒子	体部外面：タテヘラミガキ 体部内面：ヨコ・タテミガキ	有稜高坏。被熱により器面が荒れる
2号流路N9 第8図	3	80-69	高坏	坏部30% 脚部欠損	(20.0)	7.6～	—	橙色	白色粒子	内外面：タテヘラミガキ	内湾気味に開く。
2号流路N9 第8図	4	—	高坏	脚部台部～脚部中　100%	—	4.0～	—	淡褐色	赤褐色粒子	外面：ヘラナデ 内面：ヘラケズリ	円形透穴3
2号流路N9 第8図	5	86-156	高坏	接合部100%	—	5.6～	—	赤褐色	黒色粒子	外面：タテ・ナナメヘラミガキ 内面：タテナデ	円形透孔4。外面赤色塗彩
2号流路N9 第8図	6	80-66	小形器台	器受部100%	8.7	3.5～	—	橙色	黒色粒子	外面：タテハケ目 内面：ナデ	折り返し口縁。貫通孔。器厚が厚い
2号流路N9 第8図	7	80-67	器台	脚部50%	—	4.7～	—	明褐色	黒色粒子	外面：ナナメ・タテヘラミガキ 内面：タテナデ	被熱により器面が荒れる
2号流路N9 第8図	8	—	器台	脚部　80%	—	2.7～	—	橙褐色	白色粒子	外面：タテヘラケズリ	中央部穿孔
2号流路N9 第8図	9	—	器台	脚部　50%	—	2.4～	(8.4)	橙褐色	雲母、白色粒子	外面：ヨコヘラミガキ 内面：ヨコハケ目→ヘラミガキ	台付甕の脚部の可能性あり
2号流路N9 第8図	10	80-71	高坏	脚部70%	—	6.5～	14.5	赤褐色～橙色	黒色粒子	外面：丁寧なタテヘラミガキ 内面：ヨコヘラナデ	脚部・坏部ソケット状接合。被熱で器面荒れ、内面に煤付着
2号流路N9 第8図	11	—	甕	口縁部　破片	—	—	—	暗褐色	石英	内面：ヨコナデ	口縁部に輪積痕
2号流路N9 第8図	12	80-65	鉢	全体の70%	12.4	9.6	5.5	褐色	白色粒子	外面：ヨコヘラナデ 内面：ヘラナデ	被熱により器面が荒れる
2号流路N9 第8図	13	80-72	鉢	全体50%	11.8	4.7	3.2	橙色	黒色粒子	外面：ヨコヘラナデ 内面：指頭圧痕、ヘラナデ	被熱により器面が荒れる
2号流路N9 第8図	14	80-74	埦	全体80%	10.6	6.3	3.4	赤褐色～ 橙色	黒色粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：ヘラナデ	短外反口縁。器厚かなり薄い。外面・口縁部内面赤色塗彩。
2号流路N9 第8図	15	80-75	小形平底 壺	頸部～体底部 60%	—	7.3～	2.9	褐色	黒色粒子	体部外面：ヨコナデ、ミガキ 体部内面：ヨコヘラナデ	くの字頸部。器厚厚い
2号流路N9 第8図	16	80-76	小形丸底 壺	頸部～体部 70%	—	11.4～	—	赤褐色～ 淡褐色	白色粒子 雲母粒子	体部外面：タテヘラミガキ 体部内面：指頭圧痕、ナデ	くの字頸部。外面赤色塗彩。外面黒色変化。搬入土器
2号流路N9 第8図	17	80-77	小形丸底 壺	体底部100%	—	13.8～	4.4	赤褐色～ 橙色	白色粒子	体部外面：ナナメヘラミガキ 体部内面：ナデ	凹み底。外面赤色塗彩。被熱により器面が荒れる
2号流路N9 第8図	18	86-157	甕	全体の80%	12.8	14.4	6.0	橙色	黒色粒子	体部外面：ナナメ・ヨコナデ 体部内面：ヨコヘラナデ	2段輪積み口縁。器厚が薄い
2号流路N9 第8図	19	80-78	甕	全体20%	(13.4)	16.8	(7.9)	橙色	黒色粒子	口頸部外面：タテハケ目 体部外面：タテ・ナナメハケ目 口頸部内面：ヨコハケ目 体部内面：ヘラナデ	器厚かなり薄い。被熱により器面が荒れ、部分的に煤付着
2号流路N9 第8図	20	80-80	小形甕	完形	7.5	12.1	4.5	橙色	黒色粒子	肩部外面：タテハケ目 体部外面：ナナメヘラナデ	短外反口縁。平底。体部内面下半に煤付着。
2号流路N9 第8図	21	80-79	小形甕	口頸部100% 体部50%	14.4	14.6～	—	橙色	黒色粒子	頸部体部：タテハケ目 体部外面：ヨコ・ナナメハケ目 体部内面：ヘラナデ	外反口縁。器厚かなり薄い。被熱により外面煤付着。内面煤ける。
2号流路N9 第8図	22	—	甕	口縁部～体部 40%	(12.2)	15.6～	—	褐色	白色粒子 微小礫	外面：ナナメハメ目 内面：ヨコハケ目・ヨコナデ	復元の状況にもよるが、やや縦長の器形を呈する
2号流路N9 第8図	23	—	甕	体部下　20% 底部　100%	—	5.5～	4.9	淡褐色	微小礫 黒色粒子	外面：ヨコナデ	被熱により器面全体が荒れる。内面表面の大部分が薄く剥落
2号流路N9 第8図	24	86-158	壺	底部30%	—	8.3～	7.5	赤褐色	黒色粒子	外面：タテヘラミガキ、ハケ目 内面：ヨコヘラナデ	被熱により器面が荒れ、外面煤ける

表２　つづき

遺構番号 挿図番号	遺物番号	前報告書番号	器種	遺存率	口径	器高	底径	色調	混入物	調整技法等	備考
2号流路N9 第9図	25	81-81	広口壺	口縁部20% 体底部50%	19.8	18.6	7.8	橙色	白色粒子	体部外面：ナナメ・タテミガキ 体部内面：ヨコヘラナデ	外面赤色塗彩。外反口縁。被熱により器面荒れる
2号流路N9 第9図	26	81-82	甕	口縁部～体部中 30%	(15.5)	11.0～	—	褐色	黒色粒子	頸部外面：タテハケ目 体部外面：ナナメハケ目 体部内面：ヨコヘラナデ	内湾口縁。焼成堅緻。外面煤付着。内面煤ける。布留甕系
2号流路N9 第9図	27	81-83	甕	口縁部～体部中 位25%	(18.9)	19.6～	—	褐色	黒色粒子	口唇部外面：刺突刻目 体部外面：ナナメハケ目 頸部内面：ヨコハケ目	外反口縁。焼成堅緻。被熱により体部内面下半煤付着
2号流路N9 第9図	28	81-85	甕	口縁部～体部 60%	19.1	20.6～	—	褐色	黒色粒子、小石	体部外面：ナナメハケ目 体部内面：ナナメヘラナデ	外面が荒れる。SD046出土
2号流路N9 第9図	29	—	甕	口縁部～体部 20%	(17.6)	13.2～	—	外面：黒褐色 内面：灰褐色	白色粒子	外面：ナナメ・ヨコハケ目 内面：ヨコナデ	全体的に被熱か。外面全体に煤付着
2号流路N9 第9図	30	—	台付甕	脚台部　80%	—	5.0～	—	褐色	白色粒子	外面：タテハケ目 内面：ヨコハケ目	脚台部上面中央部には、本来厚さ1.5cm程の粘土が貼り付けられていたと考えられる
2号流路N9 第9図	31	81-90	台付甕	脚台部70%	—	7.8～	9.4	褐色	黒色粒子	外面：タテ・ナナメハケ目 内面：ナデ	被熱により外面煤ける
2号流路N9 第9図	32	81-88	小形台付甕	口縁部100% 口頸部20%	11.6	3.5～	—	灰白色	白色粒子、雲母粒子	肩部外面：ハケ目、平行線文 肩部内面：指頭圧痕、ハケ目	S字状口縁台付甕。外面鉄分付着。搬入土器
2号流路N9 第9図	33	81-89	台付甕	脚台部50%	—	4.6～	10.5	灰白色	黒色粒子	外面：ナナメハケ目 内面：指頭圧痕、タテナデ	S字状口縁台付甕。被熱により内外面煤ける。搬入土器
2号流路N9 第9図	34	—	台付甕	脚台部　破片	—	3.9～	—	灰褐色	雲母、白色粒子	外面：ナナメハケ目	S字状口縁台付甕。裾部内面の折り返しが剥落
2号流路N9 第9図	35	82-101	ミニチュア鉢	全体30%	(6.8)	2.6	4.4	橙色	白色粒子	手捏ね成形	
2号流路N9 第9図	36	82-91	坏	全体25% 底部欠損	(14.1)	3.8～	—	橙色	白色粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：ヨコヘラナデ	模倣坏。被熱のため口唇部が黒色
2号流路N9 第9図	37	82-92	坏	全体の80%	13	4.9	—	黒色～ 淡褐色	白色粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：ナデ	内外面黒色処理
2号流路N9 第9図	38	82-94	坏	全体30%	(13.1)	4.8	—	暗褐色	白色粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：タテヘラミガキ	内外面黒色処理
2号流路N9 第9図	39	89-191	坏	口縁～体部 破片	(13.6)	2.7～	—	褐色	黒色粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：ヘラナデ	模倣坏。外面黒色処理
2号流路N9 第9図	40	—	坏	底部　100%	—	1.2～	7.0	淡褐色	赤褐色粒子 白色粒子	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	外面が斑に橙色に変色
2号流路N9 第9図	41	82-99	大形坏	口縁部・体部破 片2点	—	—	—	赤褐色～ 淡褐色	白色粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：タテヘラミガキ	内外面赤色塗彩。外反口縁。被熱のため器面があれる。
2号流路N9 第9図	42	82-95	須恵器坏	坏身部25%	(15.5)	6.3～	—	灰褐色	白色粒子	ロクロ調整	焼成堅緻。外面顕著に煤ける。MT15型式併行。旧SD033出土
2号流路N9 第9図	43	82-96	須恵器坏	坏身破片	(12.7)	2.5	6.1	灰褐色	白色粒子	ロクロ調整	TK217型式併行
2号流路N9 第9図	44	82-97	須恵器杯	坏身30%	(10.8)	3.6	—	灰褐色	黒色粒子	ロクロ調整	MT15型式併行
2号流路N9 第9図	45	82-98	須恵器坏	蓋部破片	—	—	—	灰褐色	白色粒子	ロクロ調整	
2号流路N9 第10図	46	82-100	小形高坏	脚部80% 坏部欠損	—	4.3～	10.0	赤褐色～ 橙色	白色粒子	外面：タテヘラケズリ 内面：ヨコヘラナデ	短脚。外面赤色塗彩。被熱のため全体に黒色
2号流路N9 第10図	47	82-402	鉢	口頸～体部 30%	(15.1)	8.7	(6.4)	橙色	白色粒子	体部上位外面：ナナメミガキ 体部下位外面：タテミガキ	短内傾口縁。丸底。被熱により器面があれる
2号流路N9 第10図	48	85-103	埦	口頸～体部 30%	(10.7)	5.5～	—	褐色	白色・透明粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：指頭圧痕、ナデ	内湾口縁。被熱のため内外面煤ける
2号流路N9 第10図	49	82-104	鉢	口頸～体部 30%	(16.8)	11.0～	—	橙色	白色粒子	体部上位外面：ヨコケズリ 体部中下位外面：タテケズリ 体部内面：ナデ	短外反口縁。被熱により器面があれ、外面煤ける
2号流路N9 第10図	50	82-105	短頸壺	ほぼ完形	9.7	10.7	5.4	褐色	白色粒子	肩部外面：ヨコヘラケズリ 体部外面：ナナメヘラナデ 底部外面：ヨコハケ目	短直口縁。底部焼成後穿孔。器厚厚い。被熱により外面煤付着
2号流路N9 第10図	51	82-106	小形壺	口縁部20% 体部100%	13.8	13.3～	—	橙色～赤褐色	黒色粒子	体部外面：タテヘラミガキ 体部内面：タテ・ヨコナデ	短外反口縁。外面赤色塗彩。器厚が厚い。外面煤ける
2号流路N9 第10図	52	81-86	甕	口頸部100%	13.4	15.8～	—	橙色	黒色粒子	体部外面：ヨコヘラナデ 体部内面：ヘラナデ	短外反口縁。被熱により外面煤け、体部下半黒色変化
2号流路N9 第10図	53	81-84	甕	口縁～体部 40%	(16.8)	19.0～	—	褐色	黒色粒子	体部内外面：ナナメハケ目 肩部内面：ヨコヘラナデ	短く肥厚する口縁。体部内面の一部にタール状付着物
2号流路N9 第10図	54	82-107	甕	ほぼ完形	17.8	33.2	8.1	褐色	黒色粒子	体部外面：タテヘラケズリ 体部内面：ナナメヘラナデ	短内傾口縁。外面下半に煤付着。内面下半にタール付着
2号流路N9 第10図	55	—	甕	底部　100%	—	3.2～	4.7	赤褐色～ 橙色	赤褐色粒子 白色粒子	外面：ヨコケズリ 内面：タテハケ目→ヨコナデ	
2号流路N9 第10図	56	—	甕	体部下　20% 底部　100%	—	6.4～	5.6	外面：赤褐色 内面：黒褐色	赤褐色粒子 微小礫	外面：タテヘラナデ、ヨコヘラケズリ 内面：タテヘラナデ	外面の一部が剥落
2号流路N9 第10図	57	81-87	甕	体部下～底部 100%	—	8.5～	6.2	褐色	黒色粒子	体底部外面：ヨコハケ目 体底部内面：ヨコハケ目	内湾気味の口縁。被熱により外面煤付着。内面煤ける。
2号流路N9 第10図	58	83-109	須恵器甕	体部破片	—	—	—	灰褐色	黒色粒子	外面：平行カキ目 内面：同心円状当て具痕	焼成堅緻。外面全体に自然釉が簾状に付着
2号流路N9 第10図	59	82-108	甑	全体25%	(30.0)	23.8	(10.0)	橙色～赤褐色	黒色粒子	体部外面：タテ・ヨコケズリ 体部内面：ヨコヘラナデ	被熱により外面煤け、内面煤付着

Ⅲ．水神下遺跡の再評価

１．小銅鐸等について

これまで小銅鐸等周辺の遺物出土状況及び出土遺物についてみてきたわけであるが、ここでそれらの内容についてまとめてみたい。

小銅鐸等は、２号流路が東から南へ流れを大きく屈曲させるＮ９グリッド北半部で検出された。小銅鐸等が検出された付近からは、古墳時代前期中葉と後期後葉～末葉を主体とする土器が多量に出土したが、これらの土器群は標高 1.2 m付近に水平堆積する黒褐色粘土層を境として、その下層に前期の土器、上層に後期の土器が明確に分離することが明らかとなった。

小銅鐸等は、見かけ上は後期末葉に形成されたＳＤ 033 の底面の標高約 1.0 mのレベルでまとまって出土したが、ＳＤ 033 の底面を掘り過ぎた可能性があること、石製垂飾品がＳＤ 033 の底面に食い込んだ状態で発見されていること、小銅鐸等３点は一緒に取り扱われたことを考え合わせると、小銅鐸等はＳＤ 033 の底面に近い２号流路の覆土中から出土したものと判断できる。そして、黒褐色粘土層より低いレベルに相当することから、小銅鐸等は古墳時代前期中葉に廃棄されたことになる。

ここで、千葉県内における小銅鐸と重圏文鏡の分布状況についてみてみる。

小銅鐸の分布状況をみると、９例すべてが西上総地域で発見されている（表３）。

まず、時期についてみる。関東地方から出土する小銅鐸は東海地方の三遠式銅鐸分布域から出土するものと類似していることから、三遠式銅鐸の工房で製作されたものと考えられており（比田井 2001）、前述した形態分類に相当する類型の製作年代は弥生時代後期と推定され、それが何らかの形で西上総地域にもたらされていることになる。このことから、伝世期間も含めて西上総地域で発見される小銅鐸は廃棄の時期を示していることとなる。これまでの出土事例をみると、西上総における小銅鐸の廃棄時期は弥生時代後期～古墳時代前期の範囲に収まるものとされる。このことから、水神下遺跡の小銅鐸が古墳時代後期の溝に伴って出土する可能性は低いと考えられる。

次に、出土状況をみると、墓３例、住居５例、流路１例となる。墓から出土した３例は、草刈遺跡Ｈ区にの方墳周溝内の埋葬施設出土例と文脇遺跡、大井戸八木遺跡の土坑墓から出土した２例で、いずれも副葬品とは別に、葬送儀礼を執り行ったような出土状況を示している。住居出土例は、川焼台２号鐸以外は覆土中からの出土例である。ただし、川焼台２号鐸も縄文時代の小竪穴と重複しており、その陥没に伴い床面付近から出土しているようにも見られることから､いずれも住居内に意図的に埋納されたような状況は示さない。

最後に小銅鐸の形態等を比較すると、川焼台１号鐸と２号鐸は突線鈕で、１号鐸には文様が描かれるが、それ以外には文様が描かれない。一方で、文脇鐸、中越鐸、水神下鐸は内面に突帯を有し、中越鐸では鐸内から舌と思われる礫が出土していることから､これらの小銅鐸は鳴らす道具として用いられたと考えられる。

これらのことから、小銅鐸はムラの祭りに用いられ、司祭者的な性格を持つ人物に帰属する祭祀具であった可能性が考えられており（髙花 2007 他）、水神下鐸も同様に祭祀具であったと考えられる。

続いて、重圏文鏡の分布をみると、14 の出土例があるが、市原市の草刈遺跡で５例と突出して多く、水神下遺跡を含めて袖ケ浦市で２例出土しており、西上総地域で半数を占める（表４）。

時期については、小銅鐸と同様に廃絶時期と考えられるが、古墳時代前期が 10 例、同中期が２例、同後期が１例、古墳時代時期不詳が１例となり、前期の出土例が圧倒的に多い。

次に出土状況をみると、住居９例、古墳３例、土坑１例、流路１例となる。住居出土例の出土状況をすべて確認できていないが、二又堀遺跡（105 号住）、草刈遺跡Ｌ区（Ｌ 301、108）、草刈遺跡Ｋ区（Ｋ 039）では、いずれも住居壁際の床面から出土するという共通点が認められる。

以上、県内における小銅鐸と小型銅鏡出土遺跡を概観したが、これらの内容と水神下遺跡から出土した小銅鐸、小型銅鏡、石製垂飾品を比較することにより、水神下遺跡における小銅鐸等の位置づけについて考えたい。

まず、時期的な観点からすると、中越、水神下遺跡以外は弥生時代後期から古墳時代後期まで継続する集落であり、弥生時代後期以降にその集落に持ち込まれ、廃棄されたと考えられる。一方、中越遺跡では集落開始時期の古墳時代前期前～中葉に持ち込まれ、前期後葉に廃棄されたと考えられている（今泉 2002）。水神下遺跡では弥生時代の遺構は検出されておらず、古墳時代前期の集落の存在も現状では明らかとなっていないが、古墳時代前期前葉の土器が一定量出土していることから、本調査範囲の東側の未調査範囲に弥生時期後期～古墳時代前期の集落が存在し、そこに持ち込まれた小銅鐸が古墳時代前期中葉に自然流路に廃棄された可能性もある。廃棄時期については、小銅鐸は他の類例の中でも新しい時期に廃棄された一方、小型銅鏡（重圏文鏡）は県内で最も盛行する古墳時代前期に廃棄されていることになる。

小銅鐸は弥生時代からの系譜を有する祭祀具であるが、古墳時代前期まで伝世され、弥生時代の仿製鏡の流れをくむ古墳時代前期に盛行する重圏文鏡とともに出土するということは、排他的ではなく、両者がともに祭祀に用いられた可能性が考えられる。また、他の遺跡の出土例からすると、小銅鐸は司祭者的な性格を持つ人物に帰属する祭祀具と考えられることから、水神下遺跡出土の小銅鐸、小型銅鏡、そして石製垂飾品

表３　千葉県内出土小銅鐸一覧（白井 2015 をもとに、各報告書により作成）

遺跡名	所在地	出土状況	高さ(cm)	廃棄時期	備考
大井戸八木遺跡	君津市大井戸	土坑墓	9.5	弥生後期	銅釧、管玉、勾玉伴う
文脇遺跡	袖ケ浦市野里	木棺墓	10.8	弥生後期	管玉、小玉伴う
川焼台（1号）	市原市ちはら台西	住居	12.3	弥生後期後葉	突線鈕、袈裟襷文
川焼台（2号）	市原市ちはら台西	住居？	9.8	古墳初頭	突線鈕
草刈Ｈ区	市原市ちはら台西	方形周溝墓内土壙	5.9	古墳前期前葉	朱壺伴う
天神台遺跡	市原市村上	住居	6.8	古墳前期	下部欠失再加工か
草刈I区	市原市ちはら台西	住居？	5.0＋	古墳前期？	
水神下遺跡	袖ケ浦市奈良輪	流路	6.3	古墳前期中葉	重圏文鏡、石製垂飾品
中越遺跡	木更津市大久保	住居	6.4	古墳前期後葉	有孔石製品（舌か）伴う

表４　千葉県内出土重圏文鏡一覧（白井 2004 をもとに、各報告書により作成）

遺跡名	所在地	出土状況	高さ(cm)	廃棄時期	備考
戸張一番割遺跡	柏市戸張一番割	住居(30号)	6.30	古墳前期前半	
二又堀遺跡	袖ケ浦市大字大竹字二又堀	住居(105号)	7.30	古墳前期前半	赤色顔料付着
水神下遺跡	袖ケ浦市奈良輪	流路	6.40	古墳前期中葉	重圏文鏡、石製垂飾品
北野遺跡5号墳	山武市大字森字北野	古墳(5号)	6.20	古墳前期後半	
能満寺古墳	長生郡長南町芝原	古墳		古墳前期後半	破片
草刈遺跡L区	市原市ちはら台西	住居(L029B)	7.0±	古墳前期後葉	破片。鏡背に赤色顔料付着 時期は報告書から筆者が判断
草刈遺跡L区	市原市ちはら台西	住居(L301)	9.2±	古墳前期後葉	鏡背に赤色顔料付着 時期は報告書から筆者が判断
草刈遺跡L区	市原市ちはら台西	住居(L098)	4.78	古墳前期後葉	鏡背に赤色顔料付着 時期は報告書から筆者が判断
駒形遺跡	南房総市千倉町牧田	土壙	6.10	古墳前期	1号住居からの流入か
草刈遺跡K区	市原市ちはら台西	住居(K039)	5.40	古墳前期	穿孔あり。鏡背に赤色顔料付着
草刈遺跡L区	市原市ちはら台西	住居(L108)	4.83	古墳中期	時期は報告書から筆者が判断
多古台1号墳	香取郡多古町字源氏堀	古墳	5.0±	古墳中期	
片野向遺跡	香取市大字片野字向	住居	3.8±	古墳後期	鏡背に朱付着
太田大篠塚遺跡	佐倉市大字太田・大篠塚	住居	11.2±	古墳時代	破片

もそのような個人が所有したものと考えられる。

このように、水神下遺跡の小銅鐸等は司祭者的な人物に帰属した祭祀具と考えられるが、これらが廃棄された古墳時代前期中葉の水神下遺跡では、自然流路（河川）を対象とした祭祀が行われていたと考えられる。特に小銅鐸等の廃棄場所から南西方向に50mのＯ10グリッド２号流路東岸からは、水神下遺跡の中で最も多量の土器が集中して出土しており、さらに土器検出面の一部が赤化していることから、土器集中箇所の東側調査範囲外に祭祀を執行した場が存在した可能性も考えられる（第３図）。そして、流路周辺にまとまりをもって出土している古墳時代前期中葉の土器は、祭祀の結果廃棄されたものの可能性もあり、小銅鐸等が出土したＮ９グリッド北半部から比較的多量に出土した古墳時代前期中葉の土器もそのような痕跡の１つと考えられる。

土器が多量に廃棄された中に小銅鐸等が廃棄されたことは、古墳時代前期中葉にいたり、小銅鐸等を用いた前時代の祭祀の終焉を示したものと考えられる。

２．外来系土器

前述したように水神下遺跡からは古墳時代前期～後期の土器が出土しているが、時期により分布を違えている。前期は調査範囲ほぼ全域から出土しているが、数箇所の集中部が認められる。特に最も土器が集中する調査範囲南東端部のＯ10グリッドと今回再分析を行ったＮ９グリッドに前期中葉を主体とする土器が集中する傾向にある。Ｍ11グリッドの１号流路内からも多く出土する。また、調査範囲南西部のＧ13グリッド付近からは前期の古い段階の土器が比較的多く出土する。中期になると出土量は減少するもののＩ11グリッドの中世塚盛土下とＫ10グリッドに集中する傾向にある。後期になると再び広く分布するようになり、後期前葉はＪ10・Ｌ９グリッド、後期後～末葉はＭ11グリッドの１号流路、Ｎ９・Ｏ10グリッドの２号流路を中心に分布する。

前報告書ではこのような土器群を８段階に区分しており、前期の土器の中には、小銅鐸と同様に東海地方からもたらされた土器の他、畿内や北陸地方の影響を受けた土器が含まれている。今回の再分析において、これらのいわゆる「外来系土器」を再抽出し、小銅鐸等が水神下遺跡にもたらされた意義を考えた。

第12図１～６は東海地方の影響を受けた土器と考えられる。１は有稜高坏で、坏部は大きな埦形を呈し、坏部内面下部に１条の稜が巡り、内面底面中央が大きく窪む。２は器台の脚部で、中央部がやや膨らむ形状を示す。３は、小型丸底壺で、胎土に雲母粒子や白色粒子を多量に含み、搬入品の可能性もある。４は小型壺で、口唇部が内削状を呈する。瓢壺に類似か。５は小型丸底鉢で、器厚が薄く、内外面及び上げ底状の底面に著しくミガキが施される。６は小形甕で、口縁部が直線状に立ち上がり、口唇部の器厚が著しく薄くなる。底面が上げ底状を呈し底面にミガキが施される。７は北陸地方の影響を受けたと考えられる甕で、口縁部がいわゆる「５の字」状の有段口縁を呈する。胴部は在地系の形態をなしており、口縁部のみその影響が認められる。８、９は畿内布留系の甕と考えられる。８は頸部で大きく屈曲し、口縁部がやや外側に湾曲する。口唇部はつまみ上げ状を呈し内面がやや肥厚する。頸部以下の外面調整は、ヨコハケ目を施した後、ナナメナデによりハケメを磨り消している。９は器高が厚く、胎土も在地のものであるが、やや口唇部内側が肥厚し全体的な器形が球形を呈しそうなことから、布留系甕の影響を受けたものと考えられる。10～16は東海地方西部のＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕とする。）である。いずれも胎土に雲母粒子を含み、台部に関しては接合部に胎土とは異なる粘土の充填が認められる。10、11の口縁部は外反し、肩部外面に平行線文

が施される。10 の内面にはハケ目調整が施されるが、11 には認められない。13 ～ 16 の台部はハの字に広がる形状を呈し、端部は折り返される。全て２次的な被熱により器面が荒れており、11、16 については内外面に煤の付着が認められる。全体形状が判明する個体はないが、これらの諸特徴より、Ｓ字甕Ｂ類新段階からＣ類に相当すると考えられる。17、18 はＳ字甕に後続する古墳時代中期の宇田型台付甕（以下、宇田型甕とする。）である。17 は平成 4 年度の第１次調査でＬ９グリッドから出土した口縁部～肩部の破片である。口縁部外面の屈曲が消失し、内面が口唇部に並行して浅く窪む。肩部外面には粗く深いハケ目調整が施され、頸部はヨコナデが施される。18 は台部以外が遺存する個体で、口縁部先端の平坦面が断面三角形状に拡張され、口縁部全体が凹凸を失い緩やかに立ち上がる。また、口縁部付け根の器厚が薄くなり、体部の器厚も薄くなる。脚台部は欠失しているが、欠損面が磨滅していることから、意図的に打ち欠いた可能性も考えられる。17 は宇田型甕１類、18 は宇田型甕２類に相当すると考えられる（赤塚・早野 2001）。

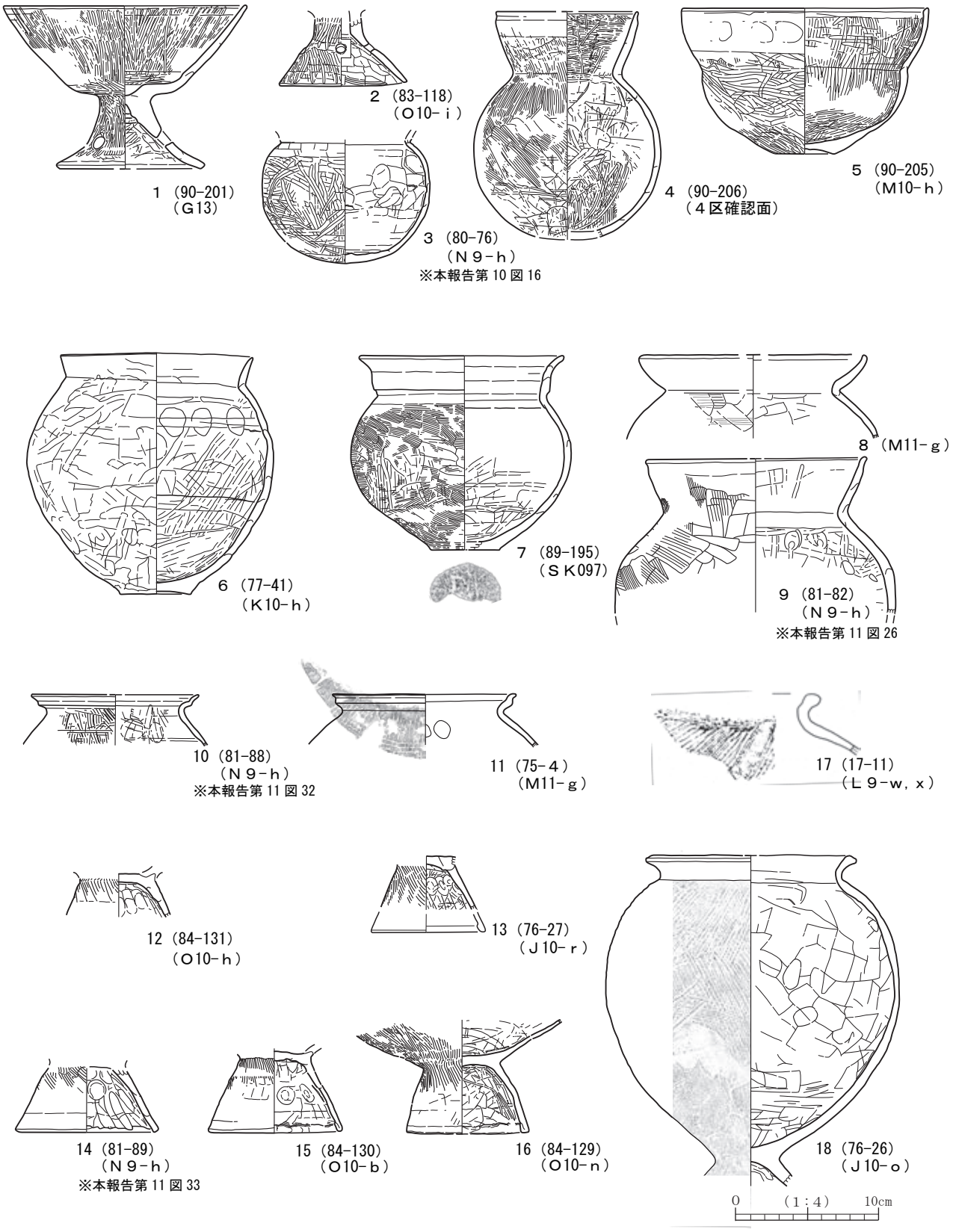
以上、外来系として抽出した土器を概観したが、在地系粘土で製作された土器に関しては抽出が困難である。そこで、外来系として比較的容易に抽出可能と思われるＳ字甕と宇田型甕について、掲載遺物以外も含めた出土重量を遺構及び中グリッド別に計測し、出土傾向を表したものが表５である。

合計でＳ字甕が 926. 14g、宇田型甕が 1, 106. 48g 出土した。分布をみると、Ｓ字甕はＭ 11 グリッドの１号流路とＯ 10 グリッドの２号流路に集中する傾向にあるが、Ｊ 10、Ｌ９グリッドの２号流路の出土量も多い。宇田型甕はＪ 10、Ｌ９グリッドの２号流路から出土しているが、それと重複するＪ 10、Ｋ 10 グリッドの２号流路は中期の土器が集中する箇所である。これらの出土遺物は、２号流路Ｊ 10-o グリッド出土の宇田型甕（第 12 図 18）以外は基本的には破片資料である。しかし、第 12 図 10 ～ 16 に掲載したＳ字甕は、少なくとも 12 ～ 16 の台部は別個体となり、さらに、２つの集中箇所以外からも出土していることから、Ｓ字甕が単体ではなく、一定量持ち込まれたと考えられる。また、煤が付着した個体も認められることから、煮炊きに使用していたとも考えられる。これらのことから、Ｓ字甕は土器だけではなく、ヒトも一緒に移動してきた可能性があり、さらに前期のＳ字甕だけではなく、後続する中期の宇田型甕までが出土することから、水神下遺跡と東海地方の結びつきが強固で継続的なものであったことを示しているのではなかろうか。そのような強固な結びつきの中で小銅鐸も水神下遺跡にもたらされたものと考えられる。

また、北陸地方の影響を受けた土器が出土しているが（第 12 図７）、それは新潟県南西部の糸魚川市から富山県方面を産地とする透閃石岩を用いた石製垂飾品（第 11 図 62）がもたらされたことと関係する可能性が高い。

３．土層堆積から見た水神下遺跡の変遷

第Ⅰ章第３節（２）で述べたように、水神下遺跡が所在する砂堆列は弥生時代中期以降に形成された可能性がある。砂堆の形成については前報告書の基本層序の項で述べたが、その際土層断面図の作図を誤った箇所があるので、まず訂正することとしたい。訂正した基本層序のセクション図を第 13 図に掲載した。①が標高を 0. 6 ｍ低く作図しており、④（前報告書の③）が標高を 0. 5 ｍ高く作図していた。修正した土層断面図をみると、①は標高 1. 6 ｍで黄色砂質土の遺構確認面となり、その上部に厚さ 0. 2 ｍの古墳時代前期の遺物を主体とする包含層が堆積する。深堀最下層は貝を含有する暗灰色砂で、最下面が青灰色岩盤層となる。②は中世塚の裾部の低い位置の土層断面である。標高１ｍ以下は貝を含む砂質土層で、最下層が青灰色岩盤層となる。③は１号塚の地山以上の土層断面模式図である。標高 1. 9 ～



第 12 図　外来系土器実測図

2.0ｍが黄色砂質土の遺構確認面となり、その直上から古墳時代中期の遺物がまとまって出土した。④は２号流路北側の平坦面のセクション図で、標高1.3～1.4ｍが黄色砂質土層の遺構確認面となる。標高0.75ｍに薄い砂層が堆積し、調査段階の最下層は黄褐色粘質土となる。⑤は調査範囲北東側の土層断面で、標高1.5ｍで黄色砂質土の遺構確認面となる。遺構確認面では古墳時代から近世までの遺構が確認されており、また、②の塚部分では標高2.0ｍ付近が遺構確認面となり、直上から古墳時代中期の遺物がまとまって出土することから、古墳時代中期までには水神下遺跡の砂堆の一部は標高2.0ｍに達していた可能性がある。

表５　Ｓ字甕・宇田型甕重量表

遺構名 グリッド名	2号流路 J10-o	2号流路 J10-r	L9-f	2号流路 L9-t	2号流路 L9-w、x	1号流路 L11-t	1号流路 L11-y	2号流路 M9-s	M10-p	1号流路 M11-g	1号流路 M11-h	1号流路 M11-l	2号流路 N9-h	2号流路 O10-a
古墳時代前期 S字甕		50.07	2.16	45.06		4.98	4.87	7.04	4.35	122.80	87.50	90.22	21.98	6.90
古墳時代中期 宇田型甕	1,040.12				66.36									

遺構名 グリッド名	2号流路 O10-b	2号流路 O10-c	2号流路 O10-d	2号流路 O10-e	2号流路 O10-f	2号流路 O10-g	2号流路 O10-h	2号流路 O10-i	2号流路 O10-j	2号流路 O10-n	O10 遺物集中	SD004	SD055
古墳時代前期 S字甕	96.06	9.92	16.33	14.01	8.22	5.63	56.72	21.79	71.38	150.07	14.20	2.00	11.88

表６　外来系土器観察表

遺構番号 挿図番号	遺物 番号	前報告書 番号	器種	遺存率	口径	器高	底径	色調	混入物	調整技法等	備考
G13 第12図	1	90-201	高坏	全体40%	(17.1)	11.6	(10.0)	明褐色	黒色粒子	外面：タテヘラミガキ 坏部内面：タテヘラミガキ 脚部内面：ヨコヘラナデ	有稜高坏。脚部：円形透孔3。坏部底面中央窪む。坏部体部内面に稜線
2号流路O10 第12図	2	83-118	小形器台	脚部80%	—	5.1～	9.1	赤褐色 ～褐色	黒色粒子	外面：タテヘラミガキ 内面：ヨコハケ目、ヘラナデ	円形透孔4．貫通孔。外面赤色塗彩。被熱により煤付着
2号流路N9 第12図 （第8図）	3 (16)	80-76	小形 丸底壺	頸部～体部 70%	—	11.4～	—	赤褐色 ～淡褐色	白色粒子 雲母粒子	体部外面：タテヘラミガキ 体部内面：指頭圧痕、ナデ	くの字頸部。外面赤色塗彩。外面黒色変化。搬入土器
M10-h 第12図	4	90-206	小形壺	全体40%	(10.0)	16.1	—	明褐色	黒色粒子	外面：タテハケ目、ヨコハケ目 口縁部内面：ヨコヘラミガキ 体部内面：タテヘラミガキ	内湾口縁。丸底。被熱により外面煤ける
G13 第12図	5	90-205	小形 丸底鉢	全体70%	17.3	10.3	4.0	淡褐色	黒色粒子	体部外面：ハケ目、ミガキ、 口縁～体部内面：タテミガキ 底面：ミガキ	凹み底。器厚が薄い。器面荒れ、タール付着。搬入土器
SK097 第12図	6	89-195	甕	口縁部～体底部 60%	14.5	13.8	4.8	橙色	黒色粒子	体部外面：ナナメ・ヨコハケ目 体部内面：ヘラナデ	有段口縁。底面：木葉痕。外面下半・内面に煤付着
2号流路K10 第12図	7	77-41	小形甕	全体90%	13.5	17.1	5	褐色	白色粒子	体部外面：ヨコヘラケズリ 体部内面：ヨコ・ナナメナデ 底面：ミガキ	被熱により外面上半にタール付着。底部内面に有機質付着。搬入土器
1号流路 第12図	8	—	甕	口縁部～肩部 20%	(15.7)	5.9～	—	淡褐色	雲母粒子 長石	口縁部外面：ヨコナデ 肩部外面：ヨコハケ目→ナナメナデ 口縁部内面：ヨコナデ 肩部内面：ヨコヘラケズリ	頸部で大きく屈曲し口縁部外反。口縁部は外面にやや湾曲する。口唇部はつまみ上げ状を呈する。器厚薄い。布留甕系
2号流路N9 第15図 （第9図）	9 (26)	81-82	甕	口縁部～体部中 30%	(15.5)	11.0～	—	褐色	黒色粒子	頸部外面：タテハケ目 体部外面：ナナメハケ目 体部内面：ヨコヘラナデ	内湾口縁。焼成堅緻。外面煤付着。内面煤ける。布留甕系か
2号流路N9 第15図 （第9図）	10 (32)	81-88	小形 台付甕	口縁部100% 口頸部20%	11.6	3.5～	—	灰白色	白色粒子 雲母粒子	肩部外面：ハケ目、平行線文 肩部内面：指頭圧痕、ハケ目	S字状口縁台付甕。外面鉄分付着。搬入土器
1号流路 第12図	11	75-4	台付甕	口頸部破片	13.0	3.7～	—	灰白色	白色・雲母粒子	外面：タテハケ目、平行線文 内面：指頭圧痕、ナデ	S字状口縁台付甕。被熱により内外面煤ける。搬入土器。
2号流路O10 第12図	12	84-131	台付甕	脚台部上半 50%	—	3.1～	—	灰白色	白色・黒色・雲母粒子	外面：ナナメハケ目、ナデ 内面：指頭圧痕、タテナデ	S字状口縁台付甕。被熱により器面が荒れる。搬入土器
2号流路J10 第12図	13	76-27	小形 台付甕	脚台部70% 端部欠損	—	3.8～	7.8	橙色	白色粒子、雲母粒子	外面：ナナメハケ目、ナデ 内面：指頭圧痕、タテナデ	S字状口縁台付甕。被熱により変色？　搬入土器
2号流路N9 第12図 （第10図）	14 (33)	81-89	台付甕	脚台部50%	—	4.6～	10.5	灰白色	黒色粒子	外面：ナナメハケ目 内面：指頭圧痕、タテナデ	S字状口縁台付甕。被熱により内外面煤ける。搬入土器
2号流路O10 第12図	15	84-130	台付甕	脚台部100%	—	5.9～	9.1	灰白色	白色・黒色粒子・雲母粒子	外面：タテハケ目、タテナデ 内面：指頭圧痕、タテナデ	S字状口縁台付甕。内面下端に折り返し。器面が荒れる。搬入土器
2号流路O10 第12図	16	84-129	台付甕	甕底部～脚台部 30%	—	7.1～	(8.7)	灰白色	白色・黒色・雲母粒子	底部外面：タテハケ目 脚台部外面：ナナメハケ目 内面：ヨコヘラナデ、タテナデ	S字状口縁台付甕。脚台部内面下端に折り返し・被熱により器面が荒れる。搬入土器
2号流路L9 第12図	17	17-11 （第1次調査）	台付甕	口縁部～肩部破片	—	4.5～	—	淡茶褐色	金雲母粒子 長石	口縁部内外面：ヨコナデ 肩部外面：ナナメハケ目 肩部内面：ヨコヘラケズリ	宇田型甕。口縁部外面が断面三角形状に張り出し、内面が浅く窪む。平成4年度第1次調査。
2号流路J10 第12図	18	76-26	台付甕	口縁～接合部 100%	13.8	23.4～	—	灰白色	白色・黒色粒子	体部外面：ナナメハケ目 体部内面：指頭圧痕、ナデ	宇田型甕。肥厚面取り口縁。外面煤付着。搬入土器

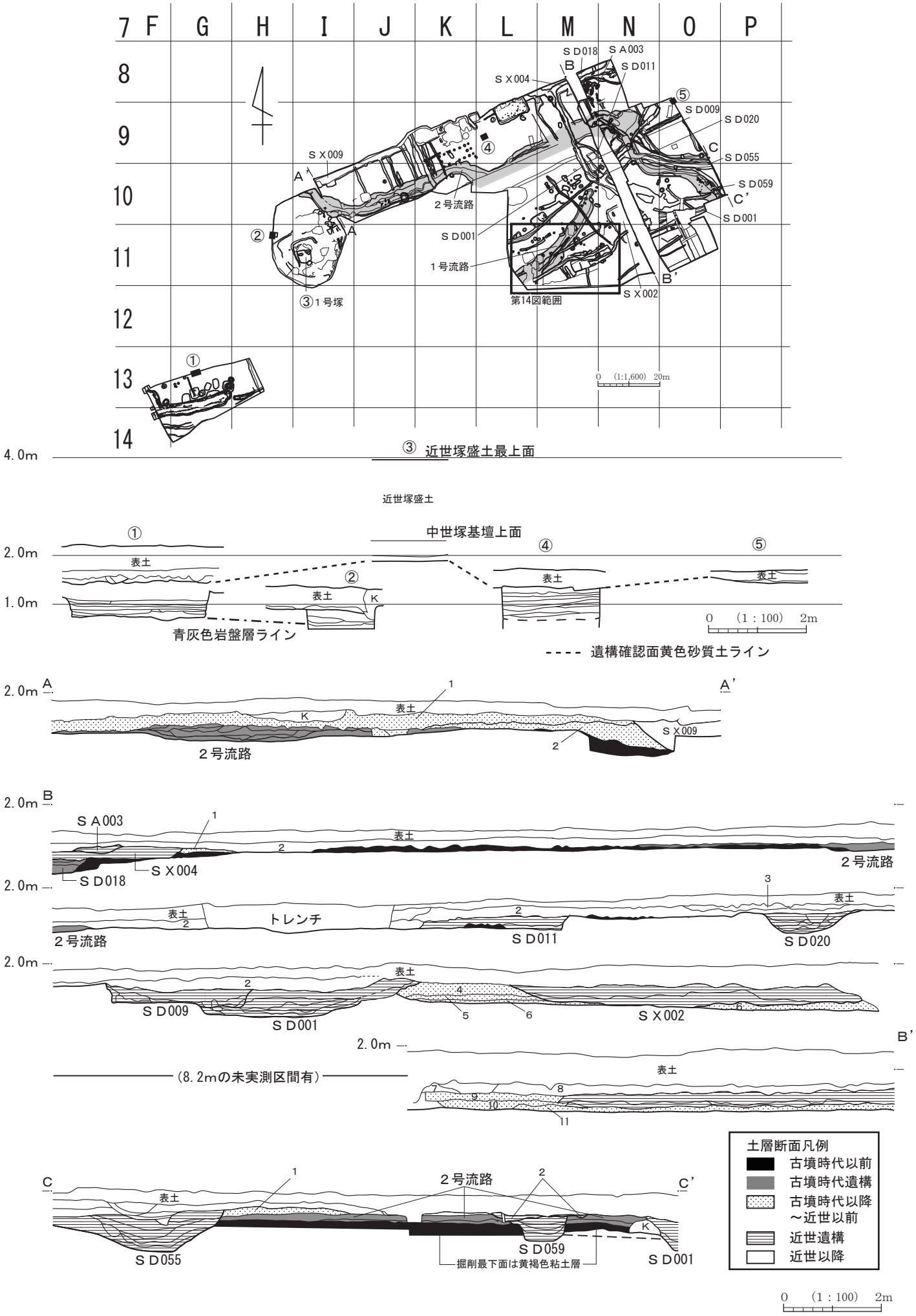
次に、水神下遺跡の調査区際の土層断面図と現表土下から土層断面図を作成したＭ 11 グリッドの１号流路周辺の土層堆積状況から、水神下遺跡の時期的な変遷を考察する。

まず、第 13 図Ａ－Ａ’ラインは、第３次調査の調査範囲西端の土層断面で、南流する２号流路が東側に流路を変換する地点に相当する。南側には２号流路の最下層にあたる黒褐色砂質土が 0.04 ～ 0.15 ｍの厚さで堆積している。２号流路の覆土は下層から中層が粘性の強い黒色砂質土で、上層は粘性のない黒褐色砂質土となる。２号流路覆土上には貝層を疎らに含む厚さ 0.2 ～ 0.3 ｍの黒褐色砂質土層（１層）が堆積している。北側では貝を含まない暗灰黄色土層（２層）を介在して１層が堆積しており、現在の土地区画と整合する近世～近代の遺構であるＳＸ 009 が１、２層を切っていることから、１、２層は古墳時代流路埋没後～近世の間に堆積したことになる。貝含有の有無により、１、２層は堆積時期が異なる可能性がある。

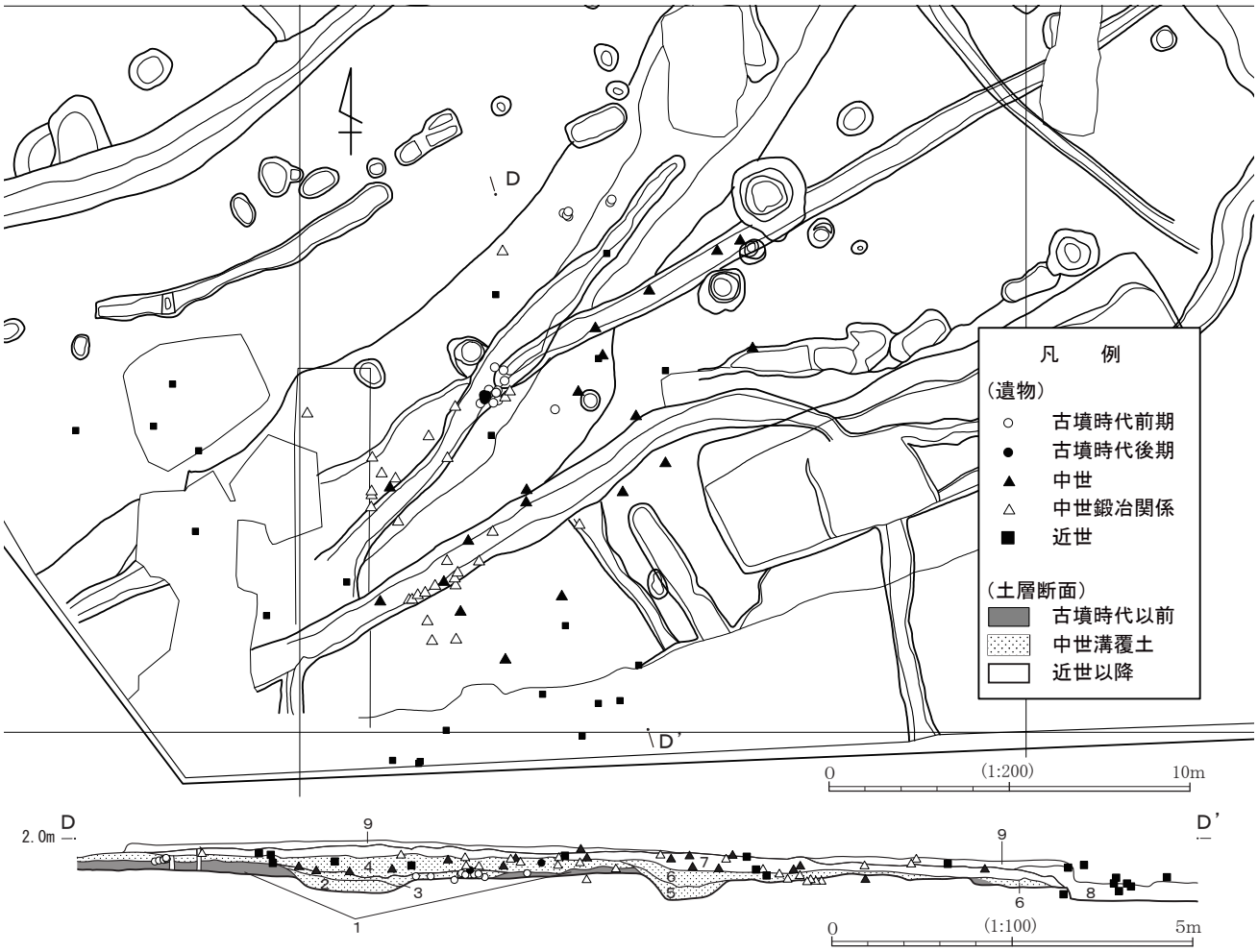
次に、第 13 図Ｂ－Ｂ’ラインは、第３次調査の調査範囲東端の土層断面で、東西方向に伸びる砂堆を南北に縦断している。最北部では古墳時代後期の溝ＳＤ 018 を被覆して近世の遺構（ＳＸ 004)、さらにその上層に近世の道路（ＳＡ 003）が形成されている。１層は厚さ 0.1 ｍ弱の褐灰色砂質土で、ＳＤ 018 に切られる土層上に堆積し、ＳＸ 004 に切られることから、古墳時代後期以降～近世の間に堆積したことになる。２層は厚さ 0.06 ～ 0.2 ｍの灰黄褐色シルト質土で、土層断面中央部付近のＳＤ 001 まで堆積している。近世の遺構を被覆していることから近世以降に堆積したことになる。ＳＤ 020 覆土上層付近では黄灰色砂質土の３層が２層上部に堆積している。土層断面南側では近世の遺構に切られるにぶい黄褐色砂質土（４層)、灰黄褐色砂礫（５層)、灰オリーブ色砂質土（６層)、黒褐色砂質土（９層)、黒色シルト（10 層)、灰色砂質土（11 層）が堆積し、それらの上面は標高 1.6 ｍの高さとなる。土層断面最南部では近世以降の上層に厚さ 0.2 ｍの灰黄褐色シルト質土（７、８層）が堆積する。

次に、第 13 図Ｃ－Ｃ’ラインは調査区南東隅の古墳時代前期土器集中箇所の土層堆積である。標高 1.1 ｍで砂堆の基盤層と考えられる黄褐色粘土層の上面が確認され、その上部の標高 1.3 ｍまで 0.2 ｍの厚さで古墳時代流路の最下層に当たる黄褐色砂質土が堆積する。本土層の上面から検出された自然木の放射性炭素年代測定（ウィグルマッチング法）により得られた年代が弥生時代中期後半であり、さらに本土層上面から古墳時代前期の遺物が出土することから、流路は弥生時代中期後半～古墳時代前期には形成されていたことになる。次に、標高 1.5 ｍまでの 0.2 ｍの厚さで古墳時代前～後期の遺物を含む２号流路の覆土である黒褐色砂質土が堆積する。さらにその上面の標高 1.7 ｍまで 0.2 ｍの厚さで、古墳時代～近世までの遺物を含む黒褐色砂質土（１層）が堆積している。本土層は近世の溝ＳＤ 055・059 に切られており、さらにＳＤ 059 の覆土上層には宝永の火山灰（２層）が堆積していることから､近世中頃以前には埋没していたことになる。

１号流路周辺のＭ 11 グリッドは、中世の鍛冶関係遺物を含め、水神下遺跡の中でも中世の遺物が比較的多く出土している箇所である。表土除去後から作成した土層断面をみると（第 14 図)、北側では、地山直上に１号流路覆土である厚さ 0.1 ｍの灰黄褐色土（１層）が堆積し、その１号流路を切り込む形でＳＤ 004 とＳＤ 015 の覆土と考えられる厚さ 0.1 ～ 0.4 ｍの黒色及び黒褐色砂質土層（２～４層）が堆積している。一方、南側では、厚さ 0.15 ｍのＳＤ 006 の覆土である黒色シルト質土（５層）上に、ＳＤ 013 の覆土と考えられる厚さ 0.04 ～ 0.2 ｍの黒色砂質土（６層）が堆積している。それら中世の溝の覆土を被覆する厚さ 0.04 ～ 0.24 ｍの黒褐色砂質土（７層）が堆積し、本土層は新しい水田層とされる黒褐色砂質土（８層）に切られる。さらにこれらを被覆する黄灰色砂質土（９層）が堆積する。この土層断面に周辺出土遺物を投影すると、古墳時代の遺物のうち、前報告書に掲載した比較的遺存状況の良好な前期の土器は地山直上及び最下層


7 F G H I J K L M N O P
8
9
10
11
12
13
14
SD018
SA003
SD011
SX004
SD009
SD020
SD055
SD059
SD001
SX009
SX002
2号流路
1号流路
1号塚
第14図範囲
0 (1:1,600) 20m
4.0m
③ 近世塚盛土最上面
近世塚盛土
中世塚基壇上面
2.0m
1.0m
表土
K
青灰色岩盤層ライン
0 (1：100) 2m
遺構確認面黄色砂質土ライン
A
A'
B
B'
C
C'
トレンチ
(8.2mの未実測区間有)
掘削最下面は黄褐色粘土層
土層断面凡例
古墳時代以前
古墳時代遺構
古墳時代以降
～近世以前
近世遺構
近世以降

第 13 図　土層断面図



第 14 図　1 号流路周辺遺物分布図

１層から出土し、古墳時代後期の遺物は前期の遺物よりも若干高いレベルから出土している。一方、中世～近世の遺物は中世の溝（ＳＤ 004、015）覆土の４層より上層の標高 1.7 ～ 1.8 ｍから出土する傾向にある。ＳＤ 006 出土遺物は、投影した角度の関係上、地山付近に位置するが、出土レベルをみるとＳＤ 006 の覆土上層から出土していることになる。これを見ると、古墳時代の１号流路が埋没していく過程で、中世以降にＳＤ 004、006、013、015 の溝が掘り込まれ、その覆土から中世以降の遺物が出土していることになる。

これまで見てきたように、水神下遺跡が所在する砂堆の基盤となる粘土層は遅くとも弥生時代中期後半までに形成され、その上層に黄褐色系砂質土が堆積し、古墳時代には標高 2.0 ｍに達する箇所もあった。古墳時代の自然流路はこの黄褐色砂質土の砂堆の裾部を流れ、流路内や流路周辺に大量の遺物が廃棄された。そして古墳時代後期になると流路の流れが止まり、陸化し、墓域が展開した。古墳時代後期以降、近世までの間に部分的に 0.1 ～ 0.2 ｍの黒褐色砂質土が堆積する箇所が見られ、古墳時代以降も砂堆が発達した様子が窺える。１号流路周辺では流路覆土を掘削して形成された溝の覆土中から鍛冶関係遺物を含む 14 世紀後半～ 15 世紀中頃を主体とする中世の遺物が多く発見されており、砂堆が発達していく過程で中世の生活が営まれた。さらに、この黒褐色砂質土を掘り込み近世の遺構も形成されており、中世後半から近世中頃にかけて砂堆上が安定した環境となっていたと考えられる。そして、これら近世中頃の遺構を被覆する厚さ 0.2 ｍほどの灰黄褐色シルト質土が調査範囲全体に堆積し、近世後期の『鳥飼家文書』「奈良輪村絵図」に描かれた景観を呈するようになったと考えられる。なお、古奈良輪湾の干拓は元禄～宝永期に実施されたとされるが、調査範囲南東隅で検出されたＳＤ 059 の覆土最上層からは宝永の火山灰が堆積しており、この宝永期には遺構の大部分が埋没していた可能性もある。

Ⅳ．総括

今回の再分析の結果、小銅鐸等が古墳時代前期に自然流路内に廃棄されたことが明らかとなった。そして、それらがもたらされた時期は明確ではないが、東海系の土器を中心に、畿内や北陸地方の影響を受けた土器が出土していることから、３世紀後半以降の古代国家形成期における列島規模のヒト、モノの動きがこの水神下遺跡まで及んでおり、そのような動きの中で小銅鐸等がもたらされたと考えられる。水神下遺跡出土の小銅鐸等は、祭祀具であり、それらは祭祀を司った司祭者に帰属するものとして、古墳時代前期中葉にいたり、前時代の祭祀具として自然流路に廃棄されたものと考えられる。その司祭者については、築造年代が小銅鐸等の廃棄時期と並行すると考えられる、水神下遺跡の南西に所在する坂戸神社古墳の被葬者と関わりがあった可能性が高い。

また、土層堆積状況から水神下遺跡が所在する砂堆の変遷を復元すると、少なくとも弥生時代中期後半には砂堆の基盤は形成されており、その砂堆の裾部に自然流路が形成され、古墳時代前期中葉にはその流路を利用した祭祀が執り行われていた。自然流路は、古墳時代後期に止水し、陸化していったようであり、その後も若干であるが砂堆が発達し、安定した環境の中で中世後半から近世中頃にかけての生活が営まれ、近世後半には「奈良輪村絵図」に見られるような景観となったと考えられる。

このように、水神下遺跡は、砂堆上の変遷を理解することができる遺跡で、東京湾を臨む立地から、通時的に西方とのつながりがあったことを示し、特に古墳時代前期においては、それが単に西上総の一地域の歴史を表すことのみならず、列島規模の歴史の動きの中に位置づけられることを物語る重要な遺跡である。

引用・参考文献

赤塚次郎 1990「２　土器・土器群の形成」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

加藤正信他 1995『袖ヶ浦市文脇遺跡』（財）千葉県文化財センター

赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』２（財）愛知県埋蔵文化財センター

比田井克人 2001「関東地方における『小銅鐸』祭祀について」『考古学雑誌』第 86 巻　第２号　日本考古学会

今泉潔他 2002『木更津市中越遺跡』（財）千葉県文化財センター

松井一明 2004「小銅鐸と銅鐸祭祀」『季刊考古学』第 86 号（株）雄山閣

白井久美子 2004「(14) 銅鏡」『千葉県の歴史　資料編　考古４　（遺跡・遺構・遺物）」（財）千葉県史料研究財団

小林清隆他 2007『千原台ニュータウンＸＸＶ―市原市草刈遺跡（Ｋ区）―』（財）千葉県教育振興財団

白井久美子 2007「第４章第１節　各地から運ばれた土器」『千葉県の歴史　通史編　原始・古代１』（財）千葉県史料研究財団

髙花宏行 2007「第３章第５節　小さな銅鐸」『千葉県の歴史　通史編　原始・古代１』（財）千葉県史料研究財団

蜂屋孝之他 2009『千原台ニュータウンＸＸＩ―市原市川焼台遺跡（上層）―』（財）千葉県教育振興財団

小林清隆他 2010『千原台ニュータウンＸＸＶ―市原市草刈遺跡（Ｌ区）―』（財）千葉県教育振興財団

當眞紀子 2010『大井戸八木遺跡・大井戸八木古墳群Ⅱ』君津市教育委員会

蜂屋孝之他 2010『千原台ニュータウンＸＸＶ―市原市草刈遺跡（Ｈ区）―』（財）千葉県教育振興財団

小高春雄 2011『千原台ニュータウンＸＸＶ―市原市草刈遺跡（Ｉ区）―』（財）千葉県教育振興財団

早野浩二 2011「土師器の編年④東海」『古墳時代史の枠組み』同成社

井上雅孝・早野浩二 2013「岩手県岩手郡滝沢村大釜館遺跡出土の宇田型甕について」『筑波大学先史学・考古学研究』第 24 号　筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻

酒巻忠史 2015「古墳時代前期首長墓の分布より見た君津地方の地域性」『袖ケ浦市史研究』第 17 号　袖ケ浦市郷土博物館

白井久美子 2015「総武の海―東京湾―と小銅鐸」『列島東部における弥生後期の変革―久ヶ原・弥生町期の現在と未来―」西相模考古学研究会

西原崇浩他 2015『水神下遺跡発掘調査報告書』袖ケ浦市教育委員会

酒巻忠史 2016「千葉県君津地方における小銅鐸・鏡出土遺跡について―シャーマニックな人物の存在を推定する―」『東邦考古』40　東邦考古学研究会

西原崇浩 2016「袖ケ浦市水神下遺跡出土の小銅鐸・重圏文鏡・石製垂飾品について」『考古学論究』第 17 号　立正大学考古学研究室

写 真 図 版

１．２号流路Ｌ９･10グリッド以西全景　（北東→）

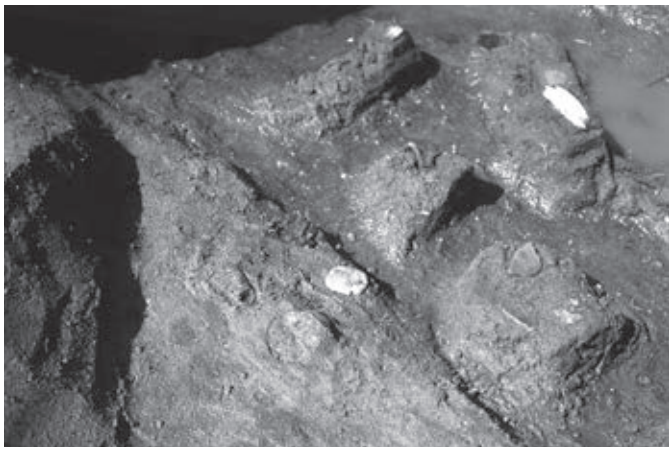
２．２号流路Ｉ 10グリッド以東完掘（北西→）

３．２号流路東側完掘　（北→）

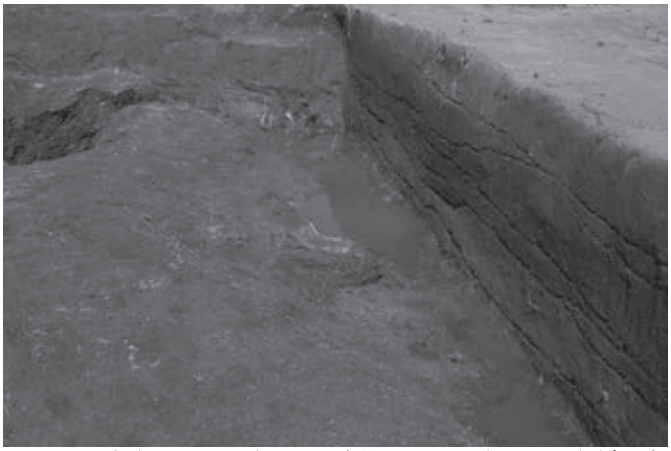
４．２号流路Ｎ９グリッド遺物出土状況全景　（東→）

５．２号流路Ｎ９グリッド遺物出土状況　（東→）

６．小銅鐸、小型仿製銅鏡出土直後　（南東→）

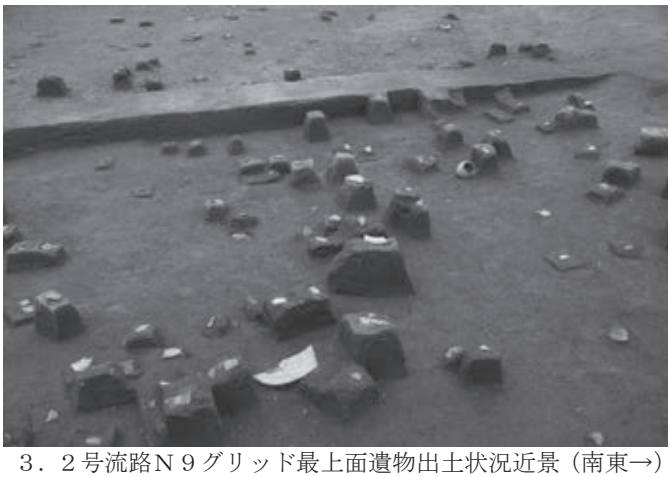

７．小銅鐸、小型銅鏡、石製垂飾品出土状況　（南東→）

８．小銅鐸、小型銅鏡、石製垂飾品出土状況　（北西真上→）



１．２号流路Ｎ９－ｇグリッド遺物出土状況(№.25､29)(南→)

２．２号流路Ｎ９グリッド最上面遺物出土状況（南東→）



３．２号流路Ｎ９グリッド最上面遺物出土状況近景（南東→）

４．２号流路Ｎ９グリッド上層遺物出土状況（南西→）

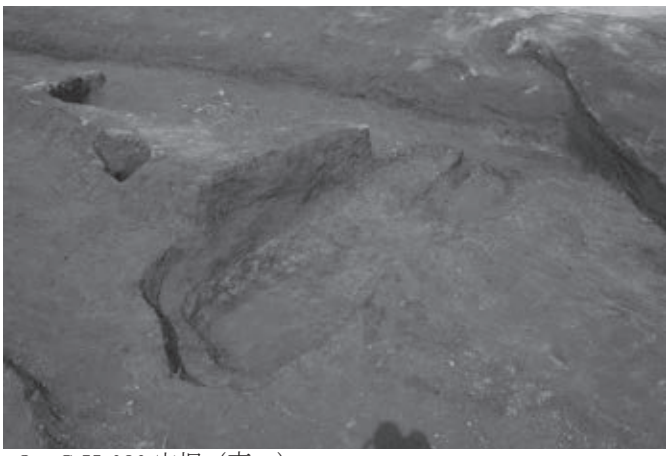
５．２号流路Ｎ９グリッド上層遺物出土状況(№.10､53､57)(西→)

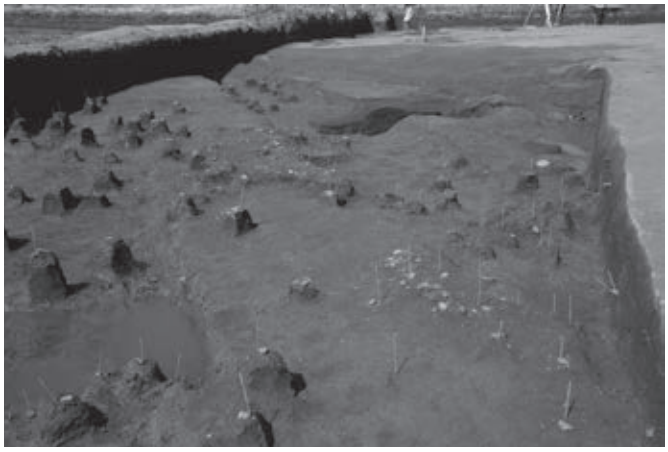
６．２号流路Ｎ９グリッド上層遺物出土状況（№.49、51、53、57）（西→）

７．２号流路Ｎ９グリッド上層遺物出土状況（№.15､54）（東→）

８．２号流路Ｎ９グリッド、ＳＫ080確認面付近遺物出土状況（№.46）（北西→）

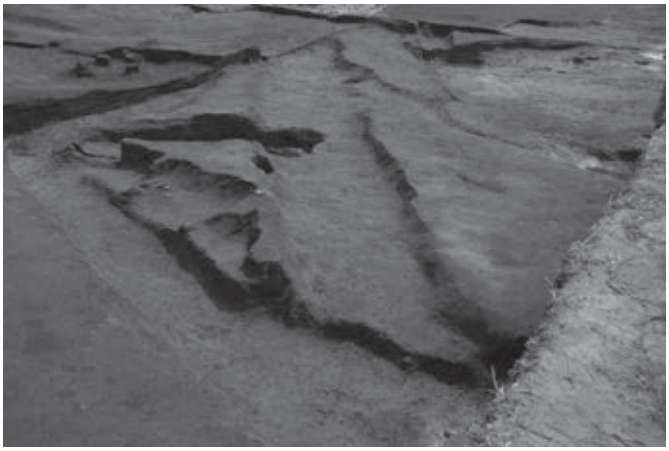
１．ＳＫ 080 完掘（南西→）


２．ＳＫ 080 完掘（南→）

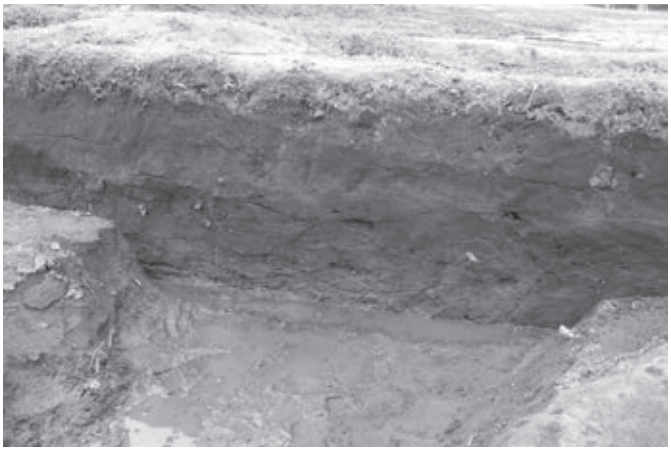

３．２号流路Ｎ９グリッド、ＳＤ 033 周辺遺物出土状況（南東→）

４．２号流路Ｎ９グリッド、ＳＤ 033 周辺遺物出土状況（北西→）

５．２号流路と SD033 の境界遺物出土状況（№ 18）（北→）


６．ＳＤ 033 完掘（北東→）

７．ＳＤ 033 完掘（南東→）


８．２号流路、ＳＤ 033 土層断面（東→）

図版４　２号流路Ｎ９グリッド出土土器

8－6

8－2

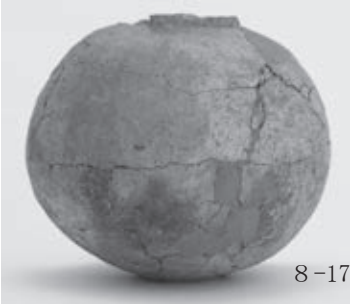
8－3

8－10

8－12

8－14

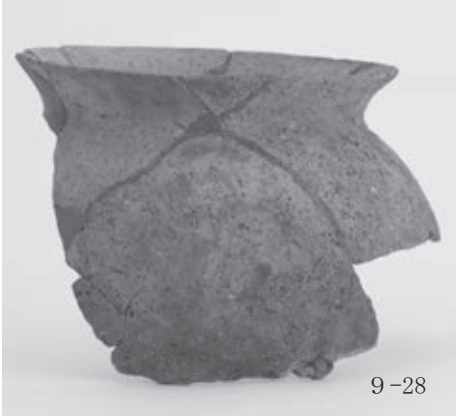
8－15


8－17

8－18

9－25

9－27


9－28

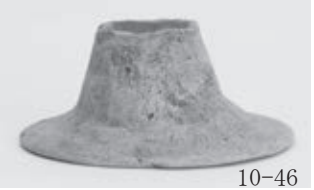
9－36

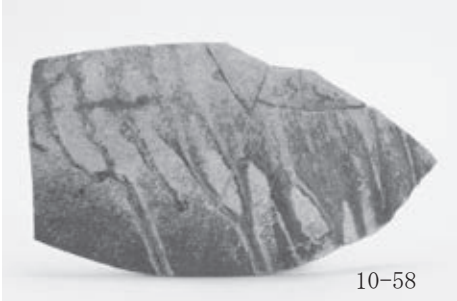
9－38

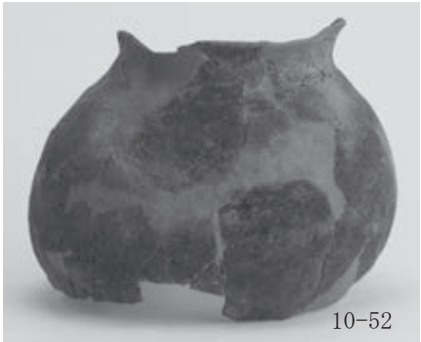
9－42

9－43

9－44


10－46


10－58


10－52

10－54

10－50

10－51

12- 1

12- 2

12- 3

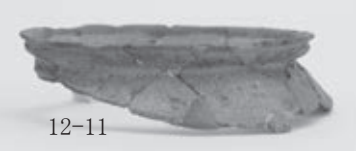
12- 5

12- 4

12- 6

12- 7

12- 8


12-11

12-10

12-18

12-12

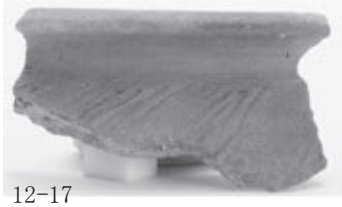
12-13

12- 9

12-14

12-15

12-16


12-17

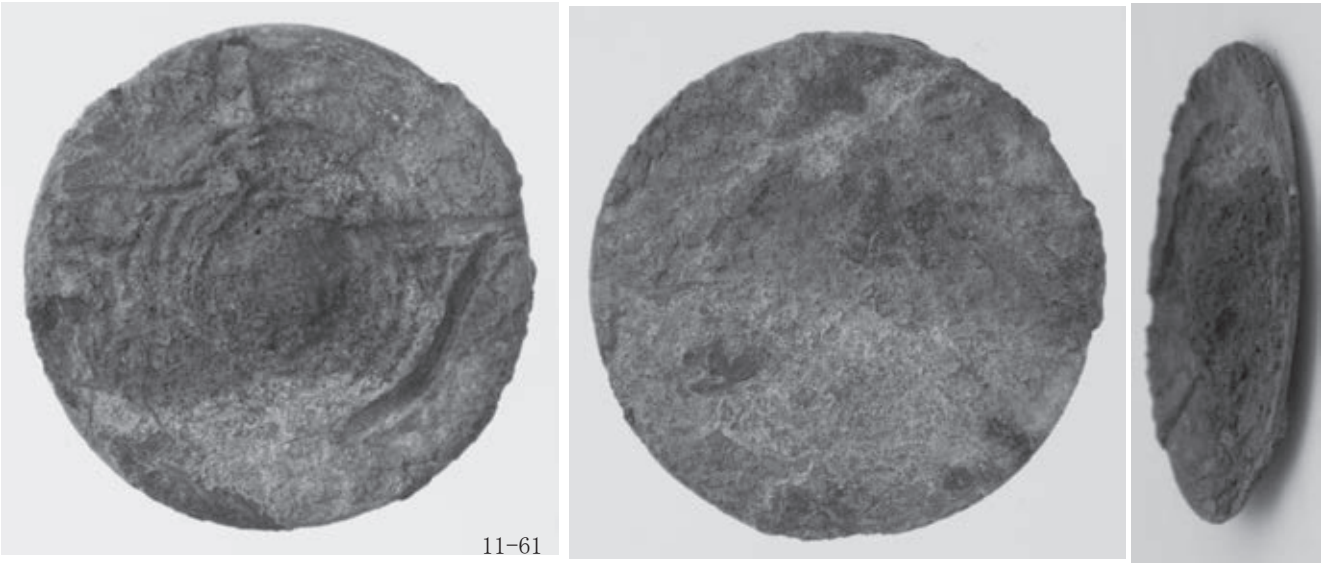
11-62 表面

11-62 裏面

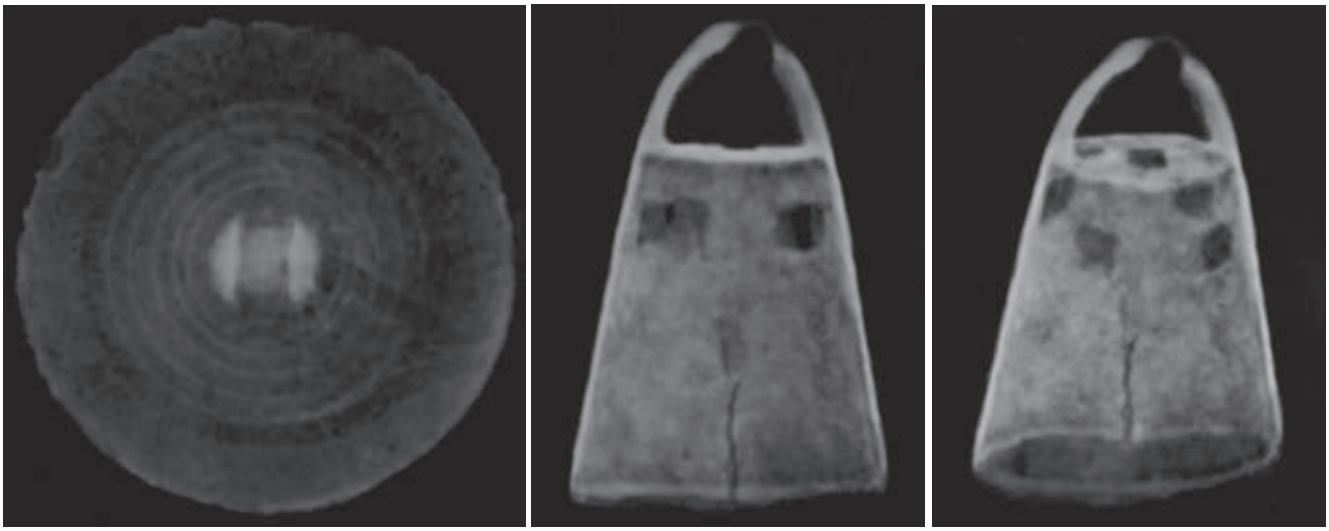
11-62 側面

図版６　小銅鐸、小型銅鏡

11-60



11-61



青銅製品Ｘ線写真

2017 年３月 23 日　印刷
2017 年３月 30 日　発行

千葉県袖ケ浦市

水神下遺跡

―小銅鐸・小型銅鏡・石製垂飾品出土状況再分析と遺跡の再評価―

発行　袖ケ浦市教育委員会
〒 299-0292
千葉県袖ケ浦市坂戸市場１番地１
電話　0438-62-2111
印刷　ワタナベメディアプロダクツ株式会社
〒 292-0834
千葉県木更津市潮見４丁目 14 番４号
電話　0438-36-5361